[資料・批評]

2017年アートクリティック活動の報告

アートクリティック
酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

Ⅰ．2017年アートクリティック活動の報告

2017年文化科学研究所にて開催されたアートクリティックの1月例会から12月例会までに報告された観劇演目リストを、以下月別に記載する。

◆1月例会：1月25日㈬ 12：15～

1．演劇『キネマと恋人』（ウッディ・アレン原作映画「カイロの紫のバラ」・ケラリーノ・サンドロヴィッチ台本・演出）（世田谷パブリックシアター＋KERA・MAP #007・制作）名古屋市芸術創造センター　12/15㈭～12/18㈰　（玉崎12/15、服部12/16）

2．コンサート『クリスマス　アヴェ・マリア』（サンクト・ペテルブルグ室内楽合奏団）日進市民会館　12/16㈮ 18：00～　（玉崎・玉崎紫）

3．オペラ『ロはロボットのロ』（こんにゃく座公演）四日市市文化会館第2ホール　12/17㈯ 14：00～　（服部）

4．演劇『偶然の旅行者』（北村想脚本・鹿目由紀演出）G/PIT　12/18㈰ 11：00～　（服部）

5．能『翁』『楊貴妃』（名古屋能楽堂正月特別公演）名古屋能楽堂　1/3㈫ 13：00～　（三苫）

6．ミュージカル『ミス・サイゴン』（東宝）愛知県芸術劇場大ホール　1/22㈰ 12：30～　（玉崎）

7．映画『ルーブルとはなにか？』名古屋シネマテーク　12/27㈫ 14：40～　（塹江）

8．シネマ歌舞伎『人情噺文七元結』（山田洋次監督・中村勘三郎主演・平成19年）ミッドランドスクエアシネマ　1/3㈫ 15：20～　（伊藤）

9．MET ライブビューイング『遥かなる愛』（初演・新演出　ロベール・ルパージュ演出）ミッドランドスクエアシネマ　1/21㈯～1/27㈮　（暫江 1/21）

10．映画『ミラノ・スカラ座 ── 魅惑の神殿』ミッドランドスクエアシネマ　1/16㈪　18：10～　（伊藤）

◆ 2 月例会：2 月 22 日㈬ 12：15～

1．演劇『冬物語』（Shakespeare 作・宮城聰演出）（SPAC 公演）静岡芸術劇場　（伊藤 2/5 14:00-、服部 2/4 15:00-）

2．演劇『教師ノシカク』（劇団そとばこまち）四日市市文化会館第 2 ホール　2/5㈰ 14：00～　（服部）

3．MET ライブビューイング　オペラ『ナブッコ』（2/4㈯～10㈮）ミッドランドスクエアシネマ　2/7㈯ 10：00～　（暫江 2/7、伊藤 2/8）

4．オペラ『連隊の娘』（びわ湖声楽アンサンブル・園田隆一郎指揮・中村敬一演出）びわ湖ホール中ホール　2/12㈰ 14：00～　（暫江・玉崎、プレトーク：暫江）

5．オペラ『カルメン』（藤原歌劇団公演・山田和樹指揮・岩田建宗演出）愛知県芸術劇場大ホール　2/11㈯ 14：00～　（服部・玉崎）

6．オペレッタ『白馬亭にて』（名古屋市文化振興事業団 2017 年企画公演・井村誠貴指揮・池山奈都子演出・松村一葉振付）アートピアホール　2/18㈯ 16：00～　（玉崎・暫江）

7．ミュージカル『フランケンシュタイン』（韓国ミュージカル・中川晃教主演）愛知県芸術劇場大ホール　2/17㈮ 18：30～　（玉崎）

8．演劇『たくらみと恋』（マーレイ・ドラマ劇場来日公演 レフ・ドージン演出）世田谷パブリックシアター　2/18㈯ 18：00～　（服部）

9．ミュージカル『Big Fish』（白井晃演出・川平慈英・浦井健治主演）日生劇場　2/18㈯ 12：00～　（服部）

10．オペラ『蝶々夫人』（ミヒャエル・パルケ指揮・笈田ヨシ演出・中嶋彰子主演）東京芸術劇場コンサートホール　2/19㈰ 14：30～　（服部）

11．シネマ歌舞伎『女殺油地獄』109 シネマズ四日市　2/11㈯～2/17㈮　（服部 2/11）

12．映画『沈黙・サイレンス』（遠藤周作「沈黙」原作・スコセッシ監督米映画）ミッドランドスクエアシネマ　2/2㈭ 15：35～　MOVIX 三好　2/7㈫ 9：30～　（伊藤 2/2、玉崎・玉崎紫 2/7）

13．映画『この世界の片隅で』MOVIX 三好　2/7㈫ 15：40～　（玉崎紫）

14．映画『君の名は』MOVIX 三好　2/6㈪　（玉崎紫）

15．映画『エゴン・シーレ―死と乙女―』名演小劇場　2/9㈭　（伊藤）

16．映画『ショコラ』センチュリーシネマ　2/13㈪　シネスイッチ銀座　2/19㈰
（竹本 2/13、服部 2/19）

◆ 3 月例会：3 月 22 日㈬ 12：15～

1．オペラ『魔笛』（名古屋芸術大・教員卒業生公演・澤脇達晴演出・室内オペラ）名古屋市西文化小劇場　2/25㈰ 15：00～18：00　（玉崎・磯貝）

2．能『高砂　作物出』（名古屋能楽堂 3 月定例公演）名古屋能楽堂　3/4㈰ 14：00～　（三苫）

3．MET ライブビューイング　オペラ『ロミオとジュリエット』（2/25㈯～3/3㈮）ミッドランドスクエアシネマ　2/25㈯ 10：00～　（伊藤 2/27、塹江 3/3、玉崎 3/1、服部 2/25）

4．演劇『リチャード三世』（英国アルメイダ劇場）TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　2/23㈭ 14：55～　（伊藤・服部・磯野）

5．コンサート『名フィル第 443 回定期コンサート』愛知県芸術劇場コンサートホール　2/25㈯ 16：00～　（伊藤）

6．演劇『不信　彼女が嘘をつく理由』（三谷幸喜作演出・段田安則主演）東京芸術劇場シアターイースト　3/16㈫ 18：30～　（玉崎紫）

7．映画『エイミー』新宿武蔵野館　3/17㈫　（玉崎紫）

8．演劇『MONO ハテノウタ』（土田英生作・演出）四日市市文化会館第 2 ホール　3/18㈯・19㈰　14：00～　（服部 3/18）

9．MET ライブビューイング　オペラ『ルサルカ』（3/18㈯～24㈮）ミッドランドスクエアシネマ　3/18㈯ 10：00～　（服部 3/19、塹江 3/21）

10．オペラ『ラインの黄金』（ハンペ演出版・沼尻竜典指揮・青山貴・黒田博・福井敬主演）びわ湖ホール大ホール　3/5㈰ 14：00～　（塹江）

11．映画『ラ・ラ・ランド』（デミアン・チャゼル監督・脚本　エマ・ストーン主演ベネツィア国際映画賞・女優賞受賞、トロント国際映画賞観客賞受賞、アカデミー賞 6 部門受賞）ミッドランドスクエアシネマ　2/24㈯～　（服部 2/26、玉崎・玉崎紫 3/1）

12．オペレッタ『天国と地獄』（日本語上演　名古屋オペラ協会、名古屋二期会・芸創オペラ 2017 年公演小島岳志指揮・たかべしげこ演出・三代真史振付）名古屋市芸術創造センター　3/4㈯・3/5㈰ 15：00～　（玉崎 3/5）

13．映画『海は燃えている』（ジャンフランコ・ロージ監督　2016 年イタリア・フランス）名演小劇場　3/6㈪ 14：45～　（伊藤）

14．映画『家族の肖像』（ヴィスコンテイ監督）（デジタル完全修復版）1974 年（イタリア・フランス）名演小劇場　3/8㈬ 10：00～　（伊藤）

15．映画『ミス・サイゴン』（25 周年記念公演 in ロンドン舞台映像）TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　3/12㈰ 12：40～　（玉崎・玉崎紫）

◆ 4 月例会：4 月 26 日㈬ 12：15～

1．オペラ『想稿・銀河鉄道の夜』（オペラシアターこんにゃく座公演・宮澤賢治作、北村想台本・萩京子作曲・大石哲史演出）名古屋市芸術創造センター　3/22㈬ 19：00～公演　（服部）

2．演劇『旅立つ家族』（演劇鑑賞会公演・劇団文化座）市民会館ビレッジホール・四日市市文化会館第 2 ホール　3/22㈬ 13：30～，18：15～　（磯貝 3/22、服部 3/31）

3．ミュージカル『コメディ・トゥナイト！』（ソンドハイム原作・宮本亜門演出・片岡愛之助主演）松竹座　4/4㈫ 11：30～　（玉崎）

4．演劇『フェードル』（ラシーヌ原作・栗山民也演出・大竹しのぶ主演）シアターコクーン　4/9㈰ 13：00～　刈谷市総合文化センター　5/7㈰　（伊藤 4/9、服部 5/7）

5．演劇『エレクトラ』（りゅーとぴあ制作・鵜山仁演出・高畑充希・白石佳代子出演）世田谷パブリックシアター　4/15㈯ 19：00～　（伊藤 4/15）

6．MET ライブビューイング　オペラ『椿姫』（4/8㈯～14㈮）ミッドランドスクエアシネマ 4/12㈬ 10：00～　（塹江 4/12）

7．National Theatre Live『ハングメン』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　4/16㈰・4/17㈪ 15：20～　（服部 4/16、玉崎 4/17、伊藤 4/19）

8．映画『アクト・プリマヴェーラー―春の劇』（オリヴェイラ監督）名古屋シネマテーク　3/29㈬　（服部）

9．映画『過去と現在　昔の恋、今の恋』（オリヴェイラ監督）名古屋シネマテーク　3/29㈬（服部）

10．映画『I, Daniel Blake』（ケン・ローチ監督）伏見ミリオン座　3/28㈫　新宿武蔵野館　3/17㈮　（服部 3/28、玉崎紫 3/17）

11．映画『LION/ライオン～25 年目のただいま』イオンシネマ東員　4/20㈭　MOVIX 三好　4/23㈰ 18：00～　（服部 4/20、玉崎紫 4/23）

12．映画『美女と野獣』（実写版）MOVIX 三好　4/23㈰ 12：30～　（玉崎・玉崎紫）

◆ 5 月例会：5 月 24 日㈬ 12：15～

1．能『石橋 大獅子』（名古屋能楽堂 5 月定例公演）名古屋能楽堂　5/21㈰ 13：30～　（三苫・磯野・塹江）

2．音楽歴史劇『1940～リヒャルト・シュトラウスの家』（AOI 音楽館・SPAC 静岡県舞台芸術センター共同事業・野平一郎芸術監督・宮城聰演出・佐々木典子出演）静岡音楽館 AOI　4/29(祝・土) 16：30～　（服部）

3．演劇『ウエルテル！』（フィリップ・ホーホマイアー：一人芝居、ニコラス・シュテーマン演出ローザンヌ・ヴィディ劇場ツアー）静岡芸術劇場　4/29㈯ 16：30～　（服部 4/29）

4．演劇『エレクトラ』（りゅーとぴあ制作）兵庫芸術文化センター中ホール　4/30㈰
（服部 4/30）

5．演劇『ダマスカス　While I Was Waiting』　オマル・アブーサアダ演出（シリアの演劇作品）静岡芸術劇場　5/3㈭ 14：30～　（伊藤）

6．演劇『フェードル』（ラシーヌ原作・栗山民也演出・大竹しのぶ主演）刈谷市総合文化センターアイリス　5/7㈰　（服部 5/7、伊藤 4/9㈰ シアターコクーン）

7．演劇『ドン・キホーテ―その狂気について―』［動く絵画］（クセック ACT 2017 田尻陽一翻案・神宮寺啓演出）名古屋市西文化小劇場　5/3㈬～5/5㈮　（磯野・服部 5/5 14:00）

8．演劇『腹話術師たち、口角泡を飛ばす』（ジゼル・ヴィエンヌ演出・フランス・ドイツの演劇作品）静岡芸術劇場　5/7㈰ 13：00～　（伊藤）

9．ミュージカル『紳士のための愛と殺人の手引き』（2015 年トニー賞受賞作品、市村正親主演）愛知県芸術劇場大ホール　5/20㈯ 17：30～　（玉崎）

10．MET ライブビューイング　オペラ『イドメネオ』（5/6㈯～12㈮）ミッドランドスクエアシネマ 5/6㈯ 10：00～　（塹江 5/11、伊藤 5/6、玉崎・服部 5/7、服部）

11．National Theatre Live 2014『フランケンシュタイン』（Ⅰカンバーバッチ博士役・Ⅱ怪人役）名演小劇場　5/6㈯～5/12㈮ 13：10～　（塹江 5/6，Ⅰ、玉崎 5/7，Ⅱ）

12．National Theatre Live 2014『ハムレット』名演小劇場　5/4㈭ 10：00～　（塹江）

13．National Theatre Live 2014『コリオレイナス』名演小劇場　5/4㈭ 13：30～　（塹江）

14．National Theatre Live 2014『オーディエンス』名演小劇場　5/6㈯ 10：00～
（塹江 5/6、玉崎 5/9）

15．映画『世界でいちばん美しい村』名演小劇場　5/4 ㈭ 17：15～　（塹江）

16．映画試写会『マザーレイク』名演小劇場　5/19㈮ 13：30～　(暫江)

17．映画試写会『残像 Afterimage』（ワイダ Andrzej Wajda 監督作・ポーランド映画）名演小劇場 5/14㈰ 13：30～　(暫江)

18．映画『カフェ・ソサイエティ』（Woody Allen 監督）伏見ミリオン座　5/14㈰　(服部)

19．映画『僕とカミンスキーの旅』（仏・独共作）伏見ミリオン座　5/14㈰　(服部)

◆ 6 月例会：6 月 21 日㈬ 12：15～

1．演劇『フル・サークル』（名演鑑賞会）ウインクあいち大ホール　5/31㈬ 13：30～　(玉崎)

2．ダンス『ふしぎの国のアリス』（小野寺修二演出カンパニーデラシネラ）新国立劇場小劇場 6/4㈰ 13：00～　(服部)

3．ミュージカル『グレート・ギャツビー』中日劇場　6/4㈰ 12：00～　(玉崎)

4．オペラ『トスカ』（パレルモ・マッシモ劇場公演　フィオレンチア・チェドリンス主演）愛知県芸術劇場大ホール　6/17㈯ 17：00～　(暫江)

5．ミュージカル『パレード』（Jason Robert Brown 歌詞・作曲 1999 年トニー賞受賞作品）東京芸術劇場プレイハウス　6/3㈯ 17：00～　愛知県芸術劇場大ホール　6/15㈭ 13：30～
(服部 6/3 17:00-、玉崎 6/15 13:30-)

6．歌舞伎『名古屋平成中村座』（義経千本桜・弁天娘女男白浪・仇ゆめ）名古屋城内二の丸広場 6/18㈰ 15：30～　(服部 6/18 15:30-、伊藤 6/7 11:00-)

7．MET ライブビューイング　オペラ『エフゲニー・オネーギン』（5/20㈯～5/26㈮）ミッドランドスクエアシネマ　5/6㈯ 10：00～　(暫江 5/25、伊藤 5/22)

8．MET ライブビューイング　オペラ『ばらの騎士』（ロバート・カーセン演出）（6/10㈯～6/16㈮）ミッドランドスクエアシネマ　5/6㈯ 10：00～　(暫江 6/14、伊藤 6/14、服部 6/10)

9．National Theatre Live 2016『三文オペラ』（ルーファス・ノリス演出・サイモン・スティーブンス脚色）TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　6/16㈮～6/22㈭　(服部 6/17、玉崎 6/18)

10．オペラ『ワルキューレ』（三澤洋史指揮・愛知祝祭管弦楽団・佐藤美晴演出構成　片寄純也、清水華澄、長谷川顕、青山貴、基村昌代出演）愛知県芸術劇場コンサートホール　6/11㈰ 15：00～
（暫江）

11．映画『海辺のリア』（仲代達也主演）伏見ミリオン座　6/14㈬ 13：00～　（服部）

12．映画『たたら侍』ミッドランドスクエアシネマ　6/7㈬　（暫江）

13．映画『モロッコ』（午前 10 時の名画）名古屋市南文化小劇場　6/20㈫　（暫江）

◆ 7 月例会： 7 月 26 日㈬ 12：15～

1．オペラ『椿姫』（パレルモ・マッシオ歌劇場引越公演）びわ湖ホール大ホール　6/24㈯ 15：00～
（暫江）

2．能狂言『附子』（平成 29 年度名古屋能楽堂芸術鑑賞会一般の部）名古屋能楽堂　6/28㈬
13：30～　（暫江）

3．コンサート『名古屋国際音楽祭第 40 回記念ガラ・コンサート』（名古屋国際音楽祭 CBC・川瀬賢太郎指揮・名フィル、小山実稚恵、宮田大、植村太郎）愛知県芸術劇場コンサートホール
7/8㈯ 15：00～　（玉崎・暫江）

4．BBC ミニドラマシリーズ 2012『嘆きの王冠・リチャード 2 世（The Hollow Crown Richard II)』（名演小劇場 Derek Jacobi, Rupert Goold 演出・Ben Whishaw, Rory Kinnear, David Suchet）
7/6㈭～7/14㈮ 13：00～　（暫江 7/13、伊藤 7/14 14:10-）

5．狂言『狂言の楽しみ』（佐藤融・お話と狂言）名演小劇場　7/11㈫ 14：00～
（暫江・磯野・三苫）

6．オペラ『フィガロの結婚』（David Heath 演出）兵庫芸術文化センター大ホール　7/15㈯
14：00～　（服部）

7．演劇『人形の家』（第七演劇　構成・演出・美術：鳴海康平）三重県文化会館小ホール　7/16㈰
14：00～　（服部）

8．演劇『蝋燭の灯、太陽の光』（テネシー・ウィリアムズ原作　名演７月例会）日本特殊鋼業市民会館ビレッジホール（名古屋市民会館中ホール）　7/18㈫ 18：30～

（磯野 7/18、磯貝 7/19 13:30、服部 7/21 18:30 四日市）

9．オペラ『ガラ・コンサート』名古屋市青少年文化センター・アートピアホール（笛田博之、中井亮一、岡本茂朗、伊藤貴之）　7/19㈬ 15：00～　（塹江・玉崎）

10．バレエ『コッペリア』（イングリッシュ・ナショナルバレエ来日公演）愛知県芸術劇場大ホール　7/20㈭ 18：45～　（塹江）

11．ミュージカル『キス・ミー・ケイト』（一路真輝主演　ハロー・ミュージカル）刈谷市総合文化センター　アイリス　7/22㈯ 15：00～、7/23㈰ 13：00～　（服部 7/22、玉崎 7/23）

12．National Theatre Live 2016『深く青い海』（The Deep Blue Sea）（キャリー・クラックネル演出・ヘレン・マックロイ主演）TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　7/7㈮～7/13㈭

（塹江・服部 7/12、伊藤 7/11 12:35-、玉崎 7/7）

13．BBC ミニドラマシリーズ 2012『嘆きの王冠・ヘンリー４世第１部』（The Hollow Crown Henry IV, Part 1）（リチャード・エア演出 ジェレミ・アイアンズ、トム・ヒドルストン、サイモン・ラッセル・ビール、ジョー・アームストロング出演）名演小劇場　7/14㈮～7/20㈭

（伊藤 7/18 14:10-、塹江 7/25）

14．映画『セールスマン』伏見ミリオン座　6/17㈰～　（伊藤 6/17、服部 6/25）

15．映画『花戦さ』（野村萬斎主演）四日市 109 シネマ　ミッドランドスクエアシネマ

（服部 6/28、磯貝 6/11）

16．映画『マンチェスター・バイ・ザ・シー』（ケネス・ローガン監督）伏見ミリオン座

（伊藤 6/30㈮ 14:25-、服部 7/11㈫）

◆８月例会：夏休み休回

◆９月例会：９月 13 日㈬ 12：15～

１．演劇『黒い雨』（名演、演劇鑑賞会特別企画　劇団民藝公演・奈良岡朋子出演）名古屋市西文化小劇場　8/6㈰ 14：00～　（磯野）

2．コミック・オペラ『ミカド』（園田隆一郎指揮・中村敬一演出　びわ湖ホール声楽アンサンブル）びわ湖ホール中ホール　8/5㈯ 14：00～　（服部・暫江）

3．演劇『とおのもののけ屋敷』（岩崎正裕作・演出）三重県文化会館小ホール　8/6㈰ 14：00～　（服部）

4．セミナー『沼尻竜典オペラ指揮者セミナーⅢ『ラ・ボエーム』』びわ湖ホール小ホール　8/7㈪ 13：00～　8/8㈫ 13：00～　8/9㈬ 11：00～　（暫江）

5．演劇『リア王』（子供のためのシェイクスピア　山崎清介脚本・演出）三重県文化会館中ホール 8/19㈯ 17：00～　（服部）

6．演劇『チック』（小山ゆうな演出）シアタートラム　8/26㈯ 18：00～　（服部）

7．演劇『プレイヤー』（長塚圭史演出　前川知大作）Bunkamura シアターコクーン　8/25㈮ 19：00～　（服部）

8．ミュージカル『ビリー・エリオット』赤坂 ACT シアター　8/26㈯ 12：00～　（服部 8/26、玉崎 9/10㈰ 12:00-、伊藤 9/26㈫）

9．演劇『柳橋物語』（名演 9 月例会、前進座公演）日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　9/7㈭ 13：30～　（磯野 9/7、磯貝 9/8 13:30-）

10．演劇『ゴドーを待ちながら』（東京シアター X（カイ）＋演劇集団マウス・オン・ファイア共同制作）京都芸術劇場春秋座　9/9㈯ 14：00～　（服部）

11．演劇『マームとジプシー 10th Anniversary Tour』（藤田貴大作・演出）穂の国豊橋芸術劇場 9/8㈮～10㈰ 19：00～　（服部）

12．BBC ミニドラマシリーズ 2012『嘆きの王冠・ヘンリー 5 世』（The Hollow Crown Henry V）（名演小劇場テア・シャーロック演出 トム・ヒドルストン出演）　7/29㈯～8/4㈮ 13：20～　（暫江）

13．BBC ミニドラマシリーズ 2012 『嘆きの王冠・ヘンリー 6 世第 1 部』（The Hollow Crown Henry VI, Part 1）（ドミニク・クック演出 トム・スターリッジ主演）名演小劇場　8/5㈯～8/11㈮
（暫江）

14．BBC ミニドラマシリーズ 2012 『嘆きの王冠・ヘンリー 6 世第 2 部』（The Hollow Crown Henry VI, Part 2）（ドミニク・クック演出 トム・スターリッジ主演）名演小劇場　8/12㈯～8/18㈮
（暫江・伊藤 8/17 14:40-）

15．BBC ミニドラマシリーズ 2012 『嘆きの王冠・リチャード 3 世第 1 部』（The Hollow Crown Richard III, Part 1）（ドミニク・クック演出 ベネディクト・カンバーバッチ主演）名演小劇場 8/19㈯～8/23㈮　（伊藤・服部 8/22 14:40-）

16．映画『エルミタージュ美術館―美を守る宮殿―』（マージー・キンモンス監督・脚本）伏見ミリオン座　8/4㈮ 9：30～　（伊藤）

17．映画『甘き人生』（マルコ・ベロッキオ監督）伏見ミリオン座　8/13㈰ 13：15～　（伊藤・竹本）

18．映画『いざ、勝負』ミッドランドスクエアシネマ　6/24㈯　（磯貝・服部 6/30）

◆ 10 月例会：10 月 25 日㈬ 12：15～

1．オペラ『三国志』（広東オペラ）愛知県芸術劇場大ホール　9/15㈮ 18：30～　（磯貝）

2．演劇『ワーニャ伯父さん』（ケラリーノ・サンドロヴィッチ演出・シス・カンパニー公演）新国立劇場小劇場　9/23㈯ 13：30～　（服部）

3．演劇『オーランドー』（白井晃演出）KAAT 神奈川芸術劇場ホール　9/23㈯ 19：00～　（服部）

4．オペラ『魔笛』（バイエルン国立歌劇場日本公演）東京文化会館　9/24㈰ 15：00～　（暫江）

5．オペラ『タンホイザー』（バイエルン国立歌劇場日本公演）NHK ホール　9/25㈪ 15：00～
（暫江）

6．歌舞伎　錦秋名古屋顔見世 10/1㈰～10/25㈬［昼の部：『恋女房染分手綱　重の井』、『番町皿屋敷』、『蜘蛛李と梓弦』］日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　10/4㈬ 11：00～
（暫江・磯貝 10/9 11:00-）

顔見世［夜の部：『春重四海波(明治維新以降の新作)』、『恋飛脚大和往来』、『連獅子』］日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　10/11㈬ 16：00～　(塹江・磯貝［夜の部］)

7．文楽『桂川連理柵』(昼)、『曽根崎心中』(夜) 名古屋市芸術創造センター　10/6㈮［昼の部 14：00～］［夜の部 18：30～］　(磯貝・塹江［昼＆夜の部］、玉崎［昼の部のみ］)

8．ミュージカル『レ・ミゼラブル』中日劇場
(磯貝 10/7［昼］、玉崎 10/9(月・祝) 12:00-)

9．NTL シネマズ『誰もいない国』(9/22㈮～9/28㈭) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　9/24㈰ 12：15～　(玉崎 9/24、塹江・服部 9/24、伊藤 9/23)

10．シネマ歌舞伎『四谷怪談』(コクーン歌舞伎　串田和美演出) ミッドランドスクエアシネマ 9/30㈯～10/20㈮　(伊藤 10/1 11:10-)

11．NTL シネマズ『お気に召すまま』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　10/13㈮～10/19㈭ 10/14㈯　(服部)

12．映画『50 年後の僕たちは』伏見ミリオン座　9/23㈯　(服部)

13．スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』(24 年新橋演舞場公演) ミッドランドスクエアシネマ　10/22㈰ 10：25～　(伊藤)

14．木ノ下歌舞伎『心中天の網島―2017 リクリエーション版―』(近松門左衛門作・木ノ下裕一監修・糸井幸之助演出音楽) 三重県文化会館小ホール　10/21㈰ 14：00～　(服部)

◆ 11 月例会：11 月 22 日㈬ 12：15～

1．オペラ『ばらの騎士』(グラインドボーン歌劇場＆東京二期会提携公演) 愛知県芸術劇場大ホール　10/29㈰ 14：00～　(服部・酒井)

2．ミュージカル『パジャマ・ゲーム』(トム・サザランド演出) 梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ　10/26㈭ 13：00～　(玉崎)

3．演劇『オセロ』(オランダ、イヴォ・ヴァン・ホーヴェ作・演出、 オランダ語上演・日本語字幕付　日本初演) 東京芸術劇場プレイハウス　11/3㈮ 17：00～　(伊藤)

4．能『杜若』、狂言『不見不聞』、能『大会』（名古屋金春会）名古屋能楽堂　11/5㈰ 14：00～
（塹江・塹江）

5．オペラ『ルサルカ』（宮城聰演出・NISSAY OPERA・山田和樹指揮）日生劇場　11/11㈯
14：00～　（服部）

6．演劇『表に出ろいっ！』（東京芸術祭 2017・野田秀樹作・演出）東京芸術劇場シアターイースト
11/11㈯ 19：00～　（服部）

7．演劇『トロイア戦争 ── トロイラスとクレシダ』（明治大学シェイクスピアプロジェクト）明治大学アカデミーホール　11/12㈰ 12：00～　（服部）

8．オペラ『オペラの魅力 vol. 27』（「ウエルテル」「アンドレア・シェニエ」他）三井住友海上しらかわホール　11/14㈫ 18：00～　（塹江）

9．オペラ『ランメルモールのルチア』（ハンガリー国立歌劇場引越公演）愛知県芸術劇場大ホール
11/16㈭ 18：30～　（塹江）

10．演劇『変身』（SPAC 公演　小野寺修二演出）静岡芸術劇場　11/18㈯ 15：00～
（服部・伊藤 12/3㈰ 14:00-）

11．NLT ライブ『橋からの眺め』（再上映 2014・2015 年 West End, 2015 年 Broadway. Ivo Van Hove 演出）名演小劇場　10/28㈯～11/3㈮ 10：00～　（玉崎 10/30、伊藤 2016 年）

12．NLT ライブ『One Man, Two Guvnors』（一人の男と二人の主人）TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　11/11㈯～11/16㈭　（伊藤 11/12 12:35-、服部 11/13）

13．MET ライブビューイング『ノルマ』（カルロ・リッツィ指揮・ジョイス・デドナート出演）ミッドランドスクエアシネマ　11/18㈯～11/24㈮　（塹江・玉崎 11/18）

14．映画『婚約者の恋人』（フランソワ・オゾン監督）伏見ミリオン座　11/8㈬　（服部）

15．映画『人生はシネマティック』伏見ミリオン座　11/15㈬　（服部）

16．映画『愛の調べ』（Song of Love, 1947. シューマン）名古屋市名東文化小劇場　11/15㈬（塹江）

◆ 12 月例会：12 月 20 日㈬ 12：15～

1．演劇『変身』（小野寺修二演出）（SPAC 公演）静岡芸術劇場　12/3㈰ 14：00～　（伊藤）

2．演劇『出てこようとしているトロンプルイユ』（ヨーロッパ企画）ウインク愛知大ホール 11/23（木・祝）14：00～　（服部）

3．オペラ『アッシジの聖フランチェスコ』（メシアン作曲・シルヴァン・カンブラン指揮・びわ湖・読響共同主催）びわ湖ホール大ホール　11/23(木・祝）13：00～　（塹江）

4．演劇『ちょっと待ってください』（ナイロン 100%　44th session ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出）三重県総合文化センター三重文化会館中ホール　12/6㈬ 19：00～　（服部）

5．演劇『検察官』（劇団東演・四日市演劇鑑賞会）（ロシアの劇団と共同、ロシア人俳優脇役出演）四日市文化会館第 2 ホール　12/8㈮ 18：15～
（服部、磯貝・名演 11/22㈬ 18：30- 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール）

6．演劇『管理人』（ハロルド・ピンター作・森新太郎演出）シアタートラム　12/9㈯ 13：00～
（服部）

7．演劇『ペール・ギュント』（イプセン原作・ヤン・ジョンウン演出・浦井健治主演）日韓共同公演　世田谷パブリックシアター・全国ライブ・ビューイングの初試み（12/21㈭ 18：30～ ミッドランドスクエアシネマ）　12/9㈯ 18：30～　（服部）

8．演劇『欲望という名の電車』（T. ウイリアムズ作・フィリップ・ブリーン演出・大竹しのぶ主演）Bunkamura シアターコクーン　12/10㈰ 13：30～　（服部）

9．NLT ライブ『ヘッダ・ガーブレル』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　12/1㈮～12/7㈭
（伊藤・玉崎 12/5 13:00-、服部 12/4）

10．MET ライブビューイング『魔笛』（ジュリー・テイモア演出再演）ミッドランドスクエアシネマ 12/9㈯～12/15㈮　（塹江・伊藤 12/13）

11．コンサート『ミラノ大聖堂聖歌隊クリスマス・コンサート』日進市民会館大ホール　12/17㈮ 18：30～　（玉崎）

◆ 2017 年夏イギリス観劇演目（玉崎紀子・玉崎紫）

エジンバラ　Edinburgh International Festival

1．8/15㈫　オペラ『ウリッセの帰還』Il ritorno d'Ulisse in patria　19：00－22：40
演奏 English Baroque Soloists, Monteverdi Choir 指揮 Sir John Eliot Gardiner Sung in Italian with English Subtitles Usher Hall, Edinburgh
☆Edinburgh Festival Fringe　4 演目

2．8/16㈬　Drama An Act of Kindness　16：00－

3．8/17㈭　Musical Into the Woods　Assembly Hall　11：30－14：30　Royal Conservative of Scotlands (RSC)

4．8/17㈭　Comedy The Story of Snow　15：00－

5．8/17㈭　Comedy Double Feature　19：17－20：15　Rose Theatre, Main St.

チチェスター　Chichester Festival

6．8/18㈮　Musical Fiddler on the Roof　Chichester Festival Theatre　19：30－22：30
Director： Daniel Evans [Show Boat] 10 July - 2 September

ロンドン

7．8/20㈰　Comedy The Comedy about a Bank Robbery [Best New Comedy: Olivier] Criterion 19：00－21：00

8．8/21㈪　Musical 13 The Musical (Robert Jason Brown 作曲) The Ambassadors 14：00－16：00

9．8/21㈪　Musical 42nd Street (2001 Broadway: Best revival) Theatre Royal, Drury Lane 19：30－22：00　Directed by Mark Bramble　Peter Mumford (Lighting) Jae Alexander (conductor)

10．8/22㈫　Musical An American in Paris: A New Musical (2014 Théâtre du Châtelete, Paris, 2015 Broadway [Tony Award]) Dominion Theatre　19：30－22：00　Directed and choreography by Christopher Wheeldon (Royal Ballet & NY City Ballet) Book: Craig Lucas　film (1951) Set and Costume by Bob Crowley [Half a Sixpence] a truly ravishing version of the Hollywood musical

11．8/23㈬　Drama The Ferryman　Gielgud Theatre　13：30－16：30
Dir: Sam Mendes (Donmar Warehouse, Chichester, NT, RSC, Royal Court) designer: Rob Howell (Groundhog Day) Composer & Sound designer: Nick Powell Choreographer: Scarlett Mackmin Peter Mumford (Top Hat, Bakkhai) 出演 Patty Considine (Quin) Laura Donnelly (Caitlin)
Jez Butterworth (writer; Jerusalem, The River, The Night Heron, Mojo, Fair Game [映画化])

12．8/23㈬　Comedy The Mentor　Vaudeville Theatre (by Daniel Kehlmann trans. by Christopher Hampton)　19：45－　F Murray Abraham 主演 dir: Lawrence Boswell

13．8/24㈭　drama The Kite Runner　Playhouse Theatre　14：30－　from 8 June
Khaled Hosseini 原作小説　Matthew Spangler 翻案　Giles Croft 演出

14．8/24㈭　NTL Cinema　Angels in America [part 2 Perestroika]　19：00－23：30　Tri Cycle Cinema（Hippodrome Vue）[ends 8/19 in NT]

15．8/25㈮　Drama　Apologia　Trafalgar Studio 1　19：30－22：00
Dir: Jamie Lloyd　主演 Stockard Channing　原作 Alexi Kaye Campbell [Olivier 賞]
Darkly funny play [Tonny & Emmy Award winner]

16．8/26㈯　Drama　Our Ladies of Perpetual Succour　Duke of York's Theatre　14：30－16：40

17．8/26㈯　Musical　Evita　Phoenix Theatre　19：45－22：00
Emma Hatton（Eva Peron）Gian Marco Schiaretti（Che）
Bill Kenwright & Bob Tomson　design（Matthew Wright）　choreography（Bill Deamer）
Lighting（Tim Oliver）　Sound（Dan Samson）orchestrated（A Lloyd Webber & David Cullen）

18．8/27㈰　NTL Cinema　Twelfth Night　19：30－22：30　Riverside Theatre, National Theatre
Dir: Simon Godwin [Man & Superman, Beaux Stratagem] Tamsin Greig [Malvolia] Mass of fun, a delicious crowd pleaser

19．8/30㈬　Musical　Lady Day at Emerson's Bar & Grill　Wyndham's Theatre　14：45－16：15　cabaret style seats

20．8/31㈭　Drama　Queen Anne　Theatre Royal, Haymarket　14：30－17：20
RSC production From Swan Theatre in Stratford -upon-Avon [2015 sold-out season]
原作 Helen Edmundson　演出 Natalie Abrahami　主演 Emma Cunninffe, Romola Garai [Sarah Churchill]

21．8/31㈭　Musical　Annie　Picadilly Theatre　19：30－22：00　a glorious revival 主演 Miranda Hart

22．9/1㈮　The Mousetrap　St. Martin's Theatre　19：30－22：00　the world's longest running show（for 65 years）

23．9/2㈯　Drama　The Ferryman　Gielgud Theatre　13：30－16：45（紀子のみ）

24．9/2㈯　Musical　Kinky Boots　Adelphi Theatre　14：30－17：00（紫のみ）

25．9/2㈯　Musical　School of Rock: The Musical　New London Theatre　19：30－22：00
Andrew Lloyd -Webber's irresistible new musical

26．9/3㈰　NTL Cinema　Angels in America（part I Millennium）Kilburn　14：00－18：00

27．9/4㈪　Drama　The Mousetrap　St. Martin's Lane　19：30－22：00

28．9/6㈬　Musical　Dreamgirls　Savoy Theatre　14：30－17：10
UK and West End premiere of the sensational Tony and Olivier Award winning musical（Feb., 2016 ～Savoy--）1981 Broadway,　2006 film.　Dir: Casey Nicholaw（Choreography）, Tim Hatley（set UK）, Gregg Barnes（costume, UK）, Hugh Vanstone（Lighting, UK）Richard Brooker（Sound, UK）

29．9/7㈭　musical　Ishq（Punjabi）Sadler's Wells Theatre　19：30－22：30　celebrating Pakistan independence（紫のみ）

Ⅱ．観劇短評選

⑴　『たくらみと恋』（2 月例会　8.）

世田谷パブリックシアターで 28 年ぶりの来日公演となったロシア国立サンクトペテルブルグマールイ・ドラマ劇場、レフ・ドージン演出『たくらみと恋』を観た。劇作家シラーによって書かれたこの作品（1784）は作曲家ヴェルディによって長大で悲劇的なオペラ作品『ルイーザ・ミラー』となり、日本ではその方が知られているだろう。今回の舞台は台詞がかなりカットされ、字幕付きで上演時間は 1 幕約 2 時間 10 分、実際には開始が 10 分遅れたが、その間集中力が全く途切れることはなかった。

大宰相ワルターの息子フェルディナンドをダニーラ・コズロフスキー、身分違いの恋人ルイーゼをエリザヴェタ・ボヤルスカヤ、ドイツ大公の愛人ミルフォード夫人をクセーニア・ラポポルトが演じた。それぞれ映画やＣＭ等で世界的に活躍している有名な俳優たちである。観客にとにかくロシア人が多かったのは、日本人にはなじみの薄い作品である一方で、有名スターが出演しロシアでは演劇賞を獲得した作品であるためかもしれない。手荷物と厚いコートをロッカーに入れ身軽になったロシア人観客が、カーテンコールで出演者に次々と花束を手渡す姿は圧巻であった。

舞台装置は、背景に黒い壁、縦横斜めに空間を横切る木の柱と、その木に囲まれた出入り口が１つ、テーブルと椅子のほかには何もない。登場人物の衣装は黒か白に統一されている。冒頭、フェルディナンドがテーブルの上に横たわったまま滑走してルイーゼに近づき、キスを奪った。白シャツ、白ジャケットに黒の蝶ネクタイ、黒ズボンの給仕姿の 7 人の男たちは、テーブルと椅子などを手際よく移動させ場面を用意する。彼らは無言・無表情で世間に関心を示さずただ命令に従って動いているようにみえるが、それは権力に手を貸すことでもある。ミルフォード夫人登場の場面では必ず小曲が流れ、彼女は給仕の男たちが差し出す手に寄りかかりながらテーブルの上をバレリーナのように軽やかに移動した。イギリス出身でありながらドイツ大公に取り入り、やがて捨てられることになる女の振る舞い、媚と強い意志、が卓越した象徴的な演技に見て取れる。登場人物の一連の動きはよく鍛練を積んだスポーツ選手のようでスタイリッシュである。

一方、ルイーザの貧しい音楽家の両親は権力者の前で怯えて震え、娘の運命を悲しんで涙を流した。冷たく尊大で腹黒い宰相ヴァルターは部下たちに命令するときにだけマイクを使い、秘書は娘をじりじりと隅に追い詰め偽の手紙を書かせた。彼らの動作や表情により字幕を見なくても張り詰めた感情や意図が伝わってきた。

最終場では儀式が始まるかのように、多数のテーブルの上に白いクロス、燭台、白い花の生けられたガラスの花瓶がセットされていく。緊張を孕んだシンボリックな美しさのなか、若い恋人たちは毒入りレモネードを飲んで衝撃的な最期を遂げる。目を瞠る迫真の演技であった。

この舞台には登場人物の感情や行動をリアルに伝えようとする重厚で写実的な演技と抽象化された象徴的な演技とがともに用いられていた。演出における伝統と革新の共存を可能にしたのは俳優たちの力量である。ロシア人観客の演劇を楽しむ熱量とともにロシア演劇の神髄を垣間見た。

（服部　記）

⑵ 『チック』（演劇 9 月例会　6.）（映画 10 月例会　12.）

ドイツ生まれの演出家小山ゆうなの評判を聞いて、世田谷シアタートラムで彼女が台本の翻訳と演出を兼ねた『チック』を観た。この作品は 2010 年に出版されドイツ国内で各種文学賞を受賞し、公共劇場で繰り返し様々な形で上演されているという。小山が劇場側から演出作品を打診された際、日本にも紹介したいとの思いで『チック』を提案したという。原作者ヴォルフガング・ヘンドルフは 2010 年に脳腫瘍が見つかってから既発表の短編を小説『チック』として書き直し発表したが、2013 年に自ら命を絶った。日本ではその年に翻訳書が出版され、映画版『チック』も 2017 年秋に公開されたが、まだよく知られているとはいえない。生と死、愛、友情、幸福について掘り下げたこの作品及び若い演出家の才能に出会ったことは今夏の大きな収穫であった。ちなみに観劇した 8 月 26 日はヘンドルフの命日であった。

シアタートラムに入ると、舞台中央に能舞台を半分くらいの大きさにした傾斜のついた四角い小舞台が設置されていた。舞台両サイドにはキッチン、ソファ、棚、冷蔵庫、テーブル、ハンガー、服など日常品の類いが無造作に置かれ、客席最前列中央の 2 席には車のハンドルが取り付けられ運転席となっていた。シアタートラムの空間はさながら小道具の散乱するおもちゃ箱であった。

お坊ちゃんキャラの篠山輝信演じるマイクがチック（柄本時生）との一夏の経験を語りだして芝居が始まった。マイクの頭上に天井から水平に吊るされていたボードは芝居が進行するにつれ、舞台後方に移動し鉛直に吊り下げられた。抑圧するものが遠のいたようにみえた。場面転換の際には俳優たちが中央の小舞台をぐるぐると回し、時空間の移動を示した。空間処理が秀逸であった。

ギムナジウムに通う 14 歳のマイクにとって、学校生活は息苦しく、同級生の女の子からは相手にもされない。彼の父親（大鷹明良）は不動産業に失敗したビジネスマンで家庭を顧みず暴力的で、アル中の母親（あめくみちこ）との喧嘩が絶えない。マイクはそれでも好きな母のことを作文の時間に発表すると、先生からは恥をさらしてはいけないと注意を受ける。夏休みが始まると、父親は若い女（土井ケイト）と「出張旅行」に、母親は「ビューティサロン」に出かける。「ビューティサロン」とは「アル中矯正施設」をさす母親の小洒落たネーミングで、この母親はアル中を深刻に捉えていないようにも見える不思議な存在である。学校でも家庭でも冴えない生活を送っているこのマイクを、ロシア移民の転校生、問題児のチックが盗んだらしいおんぼろの青い車でドライブに誘う。

チックはおじいさんの出身地「ワラキア」を目指そうと言うが、マイクにとってドイツ語の「ワラキア」は「どこにもない場所」の意である。辞書を引けばワラキアがルーマニアの寒村を指すと同時にどこにもない場所をさすメタファーであることがわかるが、この認識がずれているまま彼らは文字通り地図のない旅を始める。過去と未来双方を志向するこの旅のバックミュージックは、車に転がっていた古いカセットテープのリチャード・クレイダーマン作曲・演奏「渚のアデレーヌ」。クラシックとポピュラー両方にまたがる甘い旋律のピアノ曲をマイクが小馬鹿にすると中高年の多い客席からは失笑が漏れたが、マイクはこの曲が案外気に入ったようであった。『チック』は、物語の主人公が様々な体験を通して内面的に成長していくビルドゥングスロマンや痛快なピカレスクロマンの型をなぞりながらその枠を超えて、人間の生（性）の有り様を多面的肯定的に描いているが、小山はそのメッ

セージを舞台で複数の世界の重なりと広がりで可視化した。

語り手マイクが物語の経緯を観客に語りかける形式は、いわゆる第 4 の壁を破って、観客がのぞき見ている旅のエピソードを遠景化する。しかし、各エピソードは具体的に再現されている。マイクのジャケットを羨ましそうに褒めるチックとの会話やアイスを取り合う場面の掛け合いは、14 歳の少年たちの日常を活写する写実的な 2 人芝居となっている。他の 3 人の俳優たちは舞台端の衣装や小道具を目の前で取っ替え引っ替えして子どもから老人さらには積み荷の豚にまで素早く変身し、一人で何役もこなした。出演俳優の数や装置などで制作費を抑える必要があったのかどうかは不明だが、出演者が複数の役をこなし虚構の手の内をさらけ出す工夫で、観客は物語世界の現前とその嘘を楽しむことができたといえるだろう。

スーパーマーケットの場所を尋ねたときに、「うちはスーパーでは買い物をしない」と場所を教える代わりに、貧しいながらもおいしい料理をご馳走してくれた一家のエピソードで三輪車に乗った男の子役の大鷹は、廃村に住む元コミュニストで射撃名人も演じ、軍隊の恐ろしさと今を大切にすること「カルペ・ディエム」を教えた。料理名人のお母さん役あめくは、言語療法士のカバおばさんにもなって、骨折したチックを病院に連れて行く途中発音矯正をし続けた。あどけない少女役の土井ケイトは、ゴミの山からは二人に同道した少女イダとなり、ガソリンを他の車から抜き取る作業として舞台上で科学原理に基づいて水槽内の茶色い水をポリタンクにチューブで移してみせた。イダの伸びきった髪は眼前でカットされた。舞台はダム湖にも庭のプールにも学校の教室にもなった。

運転席に座ってハンドルを握る二人の姿はビデオカメラでとらえられ、車窓の景色ともに舞台後方のボードに映写された。復路では運転席が小舞台上に移され、向きが変えられた。またチックは舞台上で模型の車をリモコン操作し、舞台（崖）から車が落ちそうになる手前で模型を止め、車の衝突事故現場では人の手でひっくり返した。近年舞台装置を補いリアルに見せるために凝った映像やプロジェクションマッピングがよく使用されている。しかしこの作品の映像の用い方はシンプルで、逆の効果を持っている。小山は映像で写実的な本物らしさを示すよりも「今ここ」に存在することのライブ感と嘘っぽさを組み合わせた。かくしてピンクの耳をつけた積み荷の豚役の俳優たちは、衝突後舞台上に倒れた。

事故を起こして冒険は終わり、マイクは現実に引き戻された。息子に対して、父親は怒り狂い、他人に責任を課すことを教えるが、無責任にも家を出て行く。結局チックは矯正施設に送りに、マイクはお咎めなしとなる。彼が旅で大きく成長したかどうかは不明だが、彼は世間は悪い人たちばかりでないことを知った。母親は、家財道具をプールに見立てた中央の小舞台に気持ちよさそうに投げ入れながら、「人生で大切なことは、それで幸せかどうかということ」と教える。爽快感を母と一緒に味わいながら、マイクは、他人はどうでもいいこと、世の中には母親がアル中であることよりももっと悲惨なことが存在することを悟る。

50 年後の再会を約束して別れたイダからはお礼の手紙が学校に届いた。それは信じるべき未来が在ることを示している。絵本の世界から飛び出てきたような人々との不思議な出会いの数々を当事者に語らせることによって、旅の出来事は夢の世界で起こったことのようにきらきらと輝き、世界の多

様なあり方と人生の意義が示されたのである。冒険に必要なのは正確な知識と信頼と今ここにかけてみる勇気であった。成長物語というよりも未来を否定された作家が未来へ託すメッセージを盛り込んだ作品であり、ドイツ国内で繰り返し上演されているのもそのためと思われる。後半焦点が少しぼけてしまったが、小山は見せ方がうまいと思った。

『チック』の映画版、ファティ・アキン監督『50年後のボクたちは』は「かつて14歳だったすべての大人たちへ贈る、疾走感と切なさがつまったロード・ムービー」とある。こちらはノスタルジックな視点から冒険物語が描かれていた。映画では事故の後チックは足を引きずって現場から逃走する。これは、移民を官憲からは遠ざけたいという監督の意志のようにも思われた。彼は、トルコ移民の子としてドイツで育ったのである。この映画はS・キングの『スタンド・バイ・ミー』を思い出させたが、演劇ではそうではなかった。 (服部　記)

⑶ 『プレイヤー』(9月例会　7.)

約10年前に前川知大主催のイキウメで上演された戯曲『PLAYER』に新たな枠構造を加えて長塚圭史が演出した舞台、『プレイヤー』をシアターコクーンで観た。

舞台はある地方都市の公共劇場のリハーサル室で、スターから地元の大学生まで、様々な俳優やスタッフたちが集まっている。その地方都市出身で今は亡き作家が書いた未完の演劇のリハーサルが行われているのである。

劇中劇『PLAYER』では行方不明となった天野真(あまのまこと)が、友人達の口を借りて発言し始める。思い出を語ることによって死者が記憶の中で蘇るということなのだろうが、天野が参加していた瞑想ワークショップ指導者の時枝は、死者との共存は世界を変える第一歩だと語り、参加者に新たな行動（自殺）を勧める。カルトとしか思えない時枝の主張に、当初集団催眠と考えていた刑事も次第に飲み込まれてゆく。死が生を侵食していくのである。

この劇中劇は未完であるため、演出家はアドリブで補って作品を完成させようと提案する。つまり、出演者たちの身体を通して劇作家を再生させようというのである。舞台は、劇中劇と稽古場という二つの人間関係を行き来しながら進む。劇中劇中で死者の言葉を友人が「再生」することによって今を生き始める死者と、戯曲に書かれた言葉を紡いで俳優が役になりきろうとする姿が重なる。シェイクスピアも役者たちの身体を通して今を生きているんだという劇中劇の出演者の台詞にコクーンの観客は反応して笑う。時枝の倒錯した死生観に、劇中人物だけでなく、俳優たちも感覚を狂わされ、生と死、虚構と現実の境界が曖昧になって、コクーンの観客たちにとっても目の前で演じられていることが劇中劇なのかリハーサル室の出来事なのか区別がつけにくい作劇となっている。気持ち悪さを感じた。

『PLAYER』の発想は興味深いし、発表当時評判になったのも頷ける。しかし、『PLAYER』を劇中劇にしたときの外枠の設定に無理があったように思われる。虚構世界の中では、何が真実で何が真実でないのか、何が正しく何が悪いことなのかわかりにくい。私たちは虚構の中で判断を宙づりにしてああでもないこうでもないと思いを巡らす。しかし、現実世界が虚構世界にずるずると浸食されて

はならない。虚構世界と現実世界の区別がつかないために引き起こされる事件は、カルトに絡んだ事件以外にも現代社会でしばしば見かけられるが、現実にあっては悪いことは悪い。

『プレイヤー』で公共劇場のリハーサル室は劇中劇『PLAYER』に対しては現実である。一般に役者は現実世界で素の自分を冷静に意識していなければ演じることにはならない。リハーサル室の役者たちにその意識が欠けていたとすれば、劇中劇は演劇として失敗作に終わり、結果として外枠の劇も失敗に終わる。また、人が主体的に読み直し書き直しを行なわなければ、シェイクスピアも今に生きてこないだろう。この作品の居心地の悪さは、劇中劇構造が演劇行為や読み行為における主体をないがしろにしたことによって生じたように思われる。 (服部　記)

⑷ 『ゴドーを待ちながら』(9 月例会　10.)

ベケット作カハル・クイン演出『ゴドーを待ちながら』(以下、『ゴドー』)を京都芸術劇場春秋座で舞台上に特設された客席で観た。シアター X (カイ) とアイルランドの演劇集団マウス・オン・ファイアは 2013 年以来毎年ベケット作品の上演を続けてきたが、日本アイルランド外交関係樹立 60 周年とシアター X 創立 25 周年に当たる 2017 年にベケットの代表作をベケットの演出ノートを基に公演することにしたという。ベケットは、この作品がボードビルショーとして演じられることを快く思わず、演出に当たっては、台詞回しや言葉のニュアンス、間の取り方を口移しで教えたという。作者の意図の再現がどこまで可能なのかは不明だが、全く笑いのない舞台は緊迫感があり、スーザン・ソンタグの『サラエボでゴドーを待ちながら』においてと同様に、作品の政治性と現代の悲惨な人間の状況を浮き彫りにした。

『ゴドー』は風の音とともに幕が開いた。上手奥にジャコメッティ作品のような白い針金状の木があり、中央にヴラジミールが観客席に背を向けて黙って立っている。エストラゴンは下手の手前の岩の上に座って真っ赤になって片方の靴を脱ごうとしている。靴は人が荒野で生き続けるためには食べ物同様大変に必要なモノである。萎びた人参やチキンの骨をむさぼり食うエストラゴンと哲学的な言葉を語るヴラジミール、対照的な二人の浮浪者は社会から阻害され、人間の基本的な行動すら脅かされているらしい。ベテラン俳優による訛りの強い英語の掛け合いから彼らがマイノリティで不安に戦き出口の見えない状況に放っておかれていることが伝わってくる。また尊大な暴君ポッゾと綱につながれ疲労困憊していても働くことと考えることを強要されるラッキーの姿は、人を人とも思わぬ権力の濫用と思考停止のおぞましさを感じさせた。舞台を観ていて全く笑いは起こらなかった。

「ゴドーとは誰なのか」を問われて、ベケットは「知っていたら書いているでしょう」と答えたことは有名だ。20 世紀には『ゴドー』は歴史や社会と切り離され観念的哲学的な解釈が多くなされていたが、21 世紀になって「待つ行為」に焦点が移動したように思われる。串田和美と緒形拳の舞台やイアン・マッケランとパトリック・スチュワートの舞台などでは、ゴドーを待つあいだゲームに興じるように時間を潰し、観客から笑いをたくさん取っていた。しかし、マウス・オン・ファイアの舞台はただ待ち続ける人間の悲惨な状況をリアルに示していた。中世のエンブレムでは「絶望」は縄を持って描かれている。舞台上の二人にはズボンの細い紐はあってもそれをかける枝はすぐ折れてない。

今回の舞台は、絶望することすらままならない状況にあってなお待ち続けること、つまり、絶望と地続きに見える現代の不気味な社会情勢のなかで生きることを擬似体験させたのである。　(服部　記)

⑸ 『変身』(11 月例会　10.)

静岡芸術劇場（SPAC）で静岡県芸術センター制作小野寺修二演出の演劇『変身』を観た。この作品は「ある朝グレゴール・ザムザは気がかりな夢から目覚めると１匹の巨大な虫になっていることに気がついた。」という有名な書き出しで始まる小説を舞台化したものである。小野寺は、マイムの動きを取り入れて言語表現を切り詰めた舞台をつくる演出家である。突然に虫へと変身したグレゴールと彼を取り巻く居心地の悪い日常がどのように舞台化されるのか興味津々で出かけた。

しかし、少々懸念もあった。2017 年 6 月に小野寺演出・カンパニーデラシネア公演『不思議の国のアリス』(6 月例会 2．以下『アリス』）が少し期待はずれだったからである。『アリス』は日曜日の昼公演であったためか、会場には子供たちの姿が目立った。空間を大きくも小さくも見せるしなやかで躍動感に満ちた身体の動きや、形を変え向きを変えながら動く装置に子供たちは驚嘆し喜んでいた。言語使用を最小限に留めて演じられた不思議な世界は見ていて楽しくわかりやすかったかもしれないが、物足りなかった。デラシネアのスタイリッシュな方法では『アリス』の非論理の壁を乗り越えられないのかと思われた。

SPAC『変身』では言葉が多用されていたことにまず驚かされたが、それは突飛な舞台ではなかったということでもある。舞台上に語り手役の俳優大高浩一がいて、モノローグのようにほとんどテキスト通りの言葉を語り、グレゴール役の俳優武石守正が語りに応じて身体をくねらし演技をする。大高もときにグレゴールの役を演じる。そして虫に変身した後でも役者の外見は変わらない。観客が変身したとわかるのは、外から状況を説明する言葉と、這いつくばりのたうち回るグレゴールの動きや対応に戸惑う家族たちの様子によってである。それまで好きだったミルクを体が受け付けず吐き出したときの生理的な音と床の上に広がるグロテスクな白い液体。移動する際の床をひっかく音、ドアを開けようと口にくわえたドアノブの空回りする音、父親の投げるリンゴが体に当たったときの恐ろしく鈍い音、妹がおざなりに差し入れる乾いた食事の音、掃除婦が形ばかりの掃き掃除をする際のガサガサする音など、グレゴールを取り巻く人とモノと音の関係性が語られ表象化された舞台であった。変身は主として身体表現で表わされるとした予想は見事に外れた。

グレゴールが動かなくなると、掃除婦は箒の柄でその腹をつついて死を確認した。虫でなくても、虫のように扱われた人たちはこのような生死確認がなされるのかもしれない。家族の中で異物となっていた彼は早晩死ぬ運命であったのだ。彼が死ぬと何事もなかったかのように、父母妹の 3 人は久しぶりに唐突にピクニックに出かける。柔らかな陽の光が降り注ぐ中で妹は「すっかり娘ざかりになった」と語られる。舞台上の 3 人の安堵と喜びと希望が外見からも印象づけられ静かに芝居は終わった。

小野寺は異物であることを示すために、小説の語り手にそのまま舞台に登場させ、加えて俳優たちの動きと言葉で補う工夫を試みたのかもしれない。身体は役者に属しているが言葉は役者の外部に発せられる。ザムザ一家を取り巻く物語はこのように演じられることによって、観客を引き寄せたり遠

巻きに見物させたりしたように思われる。誰が本当に変身したのだろうか、単なるメタファーだったのだろうか。引きこもりや寝たきり老人とその家族の姿なども同時に連想され、現代的な内容だと思われた。

阿部海太郎作曲の変拍子のリズム打ちや不思議な調性感の音楽が流れる中で、舞台中央に置かれたマジックボックスのような舞台装置からは人やモノだけでなく机や椅子も現れ消えていった。SPACの役者たちのキレのいい動きと鍛えられた声も異様でいて身近な世界を表すのに効果があったと思われる。（服部　記）

⑹　*The Kite Runner*（『凧追い』）（イギリス観劇　13.）

The Kite Runner を 8 月 24 日に Playhouse Theatre で観た。“ The best page- to- stage show since War Horse ” (The Stage) という名惹句に魅せられ観劇に出かけた。原作小説 The Kite Runner（2003 刊）は、1975 年のソ連のアフガニスタン侵攻の結果、少年時代にアメリカへ亡命したカーレド・ホッセイニ（Kahled Hosseini）の処女作である。首都カブールでの少年時代の友と激動の時代の物語は、作者の経験に深く関わっている。

原作 The Kite Runner（2003）は、発売されるや世界中で 310 万部を超すベストセラーとなり、日本では「カイト・ランナー」の題名で翻訳され（2006)、映画（2007）公開後、映画邦題「君のためなら千回でも」による文庫版が出た（2014)。次作 A Thousand Splendid Suns（2007；翻訳「千の輝く太陽」2014）も処女作を上回るベストセラーとなった。どの小説も失われた平和な故郷アフガニスタンに対する作者の望郷と、戦禍を被った人々への哀惜の念が反映されている。そして戦争の対比としての人間愛が描かれ読者の心の琴線にふれる。

今回の上演脚本家マシュー・スパングラー（Matthew Spangler）はサンノゼ州立大学（San Jose State University）の演劇学科教授で、同じ地域に住む原作者ホッセイニに背景を教えてもらい、2006 年に翻案脚本を書いた。まずサンノゼ州立大学の学生公演（自身の演出、2007 年 3 月)、続いてサンノゼ・レパートリ劇場での世界初演（2009 年）が行われた。

イギリスでは Nottingham Playhouse Theatre の芸術監督ジャイルズ・クロフト（Giles Croft）の演出により 2009 年に初舞台化され、2013 年 4 月に Liverpool Everyman and Playhouse との共同制作による本格的な舞台が 3 週間公演された。この後、地方公演を経て 2016 年 12 月にロンドンに進出した。 West End の Wyndham's Theatre（756 席）公演は 12 月 21 日 preview、2017 年 1 月 10 日に開幕し、3 月 11 日に閉幕した。この公演の高評価と観客の人気から再演が望まれ、劇場街の少し端に建つ劇場 Playhouse（786 席）で 6 月 8 日から 8 月 26 日迄と再び 2 ヶ月間再演された。この再演版を、夏のロンドン行きで見ることができた。

舞台はオープンで、タブラー奏者（tabler player）ハニフ・カーン（Hanif Khan）がタブラーとバーヤの組太鼓を前にして舞台右手にすでに座っている。彼は著名なタブラー家系に生まれインド古典音楽を学び、アジアとヨーロッパ音楽の融合や古典と現代音楽の融合を目指す。全編に流れるタブラー演奏はみごとなリズムと豊かな音色により中央アジアの雰囲気を醸し出す。小説では、カブール

の凧揚げ合戦の日と、終幕の金門橋近くの川岸での凧揚げの場面で、アフガニスタンのタブラー奏者の演奏音楽が流れ、タブラーはアフガニスタン文化を反映する。

2009年アメリカ初演は、少年時代のアミール（Amir）が登場する版だが、イギリス版は、大人になったアミールが子供時代を振り返る語りで始まる。語り手アミールがドラマに大人の姿のまま加わり少年を演じながら、劇中でも回想としてのナレーションを続け、観客に説明するという2重構造になっている。それはアミールが1人称で語る原作の手法を受け継いだとも言える。アメリカ英語で話すアミール役の俳優デイヴィド・アーマド（David Ahmad）は青いシャツとブルー・ジーンズで背丈も高くアメリカ青年そのものである。ハッサン（Hassan）役のアンドレイ・コスティン（Andrei Costin）も成人俳優であるものの、小柄で細身なので、民族衣装を着た姿は子供っぽい発声の台詞も相まって、アフガンの少年をリアルに現わす。薄茶系黄土色のシャツとズボンの上にアフガンの幾何学模様の装飾で縁どられた赤い長チョッキを着、同じ色合いの赤い毛糸の頭蓋帽を被る。ハッサンはアミールの家の召使少数民族ハザラ人アリの息子で、アミールと一歳違いだが、生後直ぐ母を失った二人は同じ乳母の乳を飲んで育った。二人はいつも兄弟のように広い邸や緑豊かな庭で一緒に遊んでいた。ハッサンが発した最初の言葉は「アミール」で、アミールを世界中の誰よりも愛していることを明らかにする。このハッサンの純粋無垢な愛が、皮肉にも1975年冬以降の悲劇をひきおこすのだ。アミールを兄のように慕い、泥を食べろといえば食べるよと、何でも君の言うとおりにすると言う。凧の勝ち抜き合戦の日も、アミールの凧と優勝を争った青い凧を追ってハッサンは行く。アミールが「きっと取ってこいよ」と言うと、ハッサンはにっこり笑い「君のためなら千回でも」と叫んで消える。ハッサンが二度と笑わないまま、二人は永遠に別れるのだ。この凧を追う少年ハッサンがこの作品の原題『凧追い』である。アンドレイ・コスティンは、アミールに裏切られ、自ら犠牲になりながらも忠実な愛を貫く少年を演じて観客を感動させた。

ハッサンとアミールは毎日一緒に遊んでいるが、父がハッサンを可愛いがるので、アミールは面白くない。ハッサンは勇敢で運動神経が抜群に良く、父の理想の男の子である。凧追いでは、誰より早く走って凧を追いかけ、遠くに落ちた凧でも見つける。またガキ大将アセフが悪態をつく時、ハッサンが勇敢にアミールの前に立ちはだかり、パチンコを武器に立ち向かう。

冬の凧揚げ合戦の日は、町中の少年達が凧をあげ、大人達も通りでまた屋根に登って少年達の凧揚げを夢中で応援する。そしてタブラーの音楽が祭りの気分を高める。

簡素な舞台で、背景幕に無数の凧が空に飛びかい、舞台の少年達は凧に似せた大きな白いハンカチ様の布を飛ばし、白い布がひらひらと飛ぶのは、この舞台でも印象的な美しい場面になる。この場面には14人の劇団員全員が登場し、凧揚げする少年とその助手となる少年や、凧揚げを見物する父や友人、町の人々などに扮する。凧揚げの場面は両脇と奥が高くなった変形八百屋舞台である。原作同様、脚本は英語で書かれ英語で演じられるが、ここでは劇団員14人がペルシャ語系アフガニスタン語（Dari）も交えて歓声を上げ、凧揚げの少年たちを応援する。

優勝したアミールがうち負かした青い凧を探してハッサンは凧追いし、まさにそれを手にした時に、アセフと彼の手下に捕まり、悲劇が始まる。アセフは青い凧を寄越せと言うが、ハッサンはアミール

の勝利品だと言い張り屈しない。アセフは大柄で強い上、真鍮のナックル（拳様の武器）をもち、恐るべき残虐な拳で相手を殴り、暴力で少年達を支配する。だが、その日武器による征服でなく、ハザラ人ハッサンには性的征服こそ相応しいとアセフは決める。アセフは仲間達にハッサンを取り押さえさせ、地面にうつぶせにさせ強姦する（強姦場面は声だけ)。この強姦事件を路地の角から盗み見たアミールは怖くて、ハッサンを助けにも出て行けず、臆病にも逃げ出してしまう。その結果、自身の腕力の無さと良心の呵責に日夜悩まされる。ハッサンさえいなければ悩みから解放されると考え、誕生祝の金時計とお札の窃盗犯としてハッサンを追い出そうとする。ハッサンはアミールの心を推し測り、自分を犠牲にして盗みを認める。その結果アミールの父がいくら止めても、アリとハッサンは召使を辞めると決め、邸を去りハザラ人の住むハザラジャートに行く。元来ハザラ族は山々に暮らす遊牧民だが、土地を奪われこの村に貧しく生きている。ハッサンとアミールの無言の別れで 1 幕は終わる。

2 幕は一転してアフガニスタンの歴史的事件で始まる。1975 年ソ連侵攻が起こり、アフガニスタンは王政から共産主義共和国になる。追われた王家と親しい上層階級（パストゥン人）の父はアフガニスタン脱出を決める。家屋敷や財産管理を親友のラヒム・カーンに頼み、パキスタン経由で二人はアメリカへ亡命する。カリフォルニア州の町で、父の知人ラヘル将軍一家と知り合い、その娘ソラヤとアミールは愛し合い、結婚する。イスラム教の結婚式は、アフガニスタンの国の翡翠の緑色に溢れ、緑の垂れ幕が効果的に使われ、中でもソラヤの鮮やかな緑の衣装が美しく、この舞台で唯一の華やかな彩りの場面である。結婚式の後すぐに父はガンで死んでいくが、父のお陰で順調な人生を得たのだとアミールはやっと父の愛を覚る。

亡命から 11 年経った 2001 年 6 月、33 歳のアミールのもとに父の親友ラヒム・カーンから至急パキスタンへ来てくれと電話がかかる。パキスタンで、カブールはタリバンに占領され、ナチのユダヤ人迫害の様にハザラ人は殺戮されたと聞く。老いたラヒム・カーンの頼みでハッサンは昔通り父の邸に住み込み家政と管理をしていた。ラヒムが重病の治療にパキスタンに来ている留守に、タリバンは父の大きな邸を占拠するため、ハザラ人は邸から出て行けと言う。だがハッサンは邸の管理が務めだと抵抗し、妻と共に銃殺された。ラヒムは孤児院に入れられたハッサンの息子ソーラブを連れて来てくれと頼む。さらにラヒムはハッサンが父の息子だと教える。愕然としたアミールは初めて過去を見直す。ハッサンを息子同様に可愛がった父、ハッサンとアリが出て行く時泣いた父を思い出す。常に一緒に遊びながらハッサンを召使のハザラ人と考えてきた自身を恥じる。生前のハッサンからの心のこもった手紙を読み、ハッサンはアミールを最高の友として愛していたのに、自分はその深い友情に応えず、むしろ裏切ったことを認識する。ラヒム・カーンはアミールに、今こそ罪を贖う時だという。アミールは荒廃したアフガニスタンへと旅し、初めて故郷の惨状を目の当たりにする。次に、ハッサンを陵辱したあのアセフによってソーラブは孤児院からタリバンに移されたと知る。ソーラブの救出に軍事司令部カブール支部を訪ねると、アセフはハッサンの息子 10 歳のソーラブをも、男色の犠牲にしていた。ハッサンへの贖いのためソーラブを取り戻すために、これまで喧嘩をしたこともないアミールは生まれて初めてアセフに立ち向かう。アセフの真鋳ナックルで殴られ、殺されそうになった

時、ソーラブが父親譲りの腕前でパチンコを使い、アセフの眼に真鋳の球を打ちあててアミールを助ける。二人は、タリバンの司令部を必死に脱出し、パキスタンへ逃げ帰る。

2001 年 911 直前に、ソーラブを養子としてアメリカへ連れ帰りたいとパキスタンのアメリカ領事に申請するが身分証明がないので断られる。孤児院に又入れられると思ったソーラブは自殺未遂し、それ以降ソーラブは心を閉ざしてしまったのだ。結局、人道的査証を使い連れ帰るが、もうソーラブは誰とも話さない。ある日、アミールはサンフランシスコ、金門橋の見える緑地でのアフガン移民の集まりにソーラブを連れて行く。子供たちの凧揚げを見て、アミールはソーラブのため買った凧を高く揚げ、故郷でハッサンと一緒に凧揚げしたこと、ハッサンはカブール一の凧追いだったと話す。そのうち合戦に来た凧を見て、12 歳に戻ってアミールは凧合戦を始める。相手の凧の糸を切り落し勝った時、初めて微笑むソーラブ。そこでソーラブに凧を持たせ、自らは凧追いとなって走る。ハッサンの愛の言葉「君のためなら千回でも」を言って、落ちた凧を取りに行く。小説の台詞が、舞台でも効果的に繰り返され、エンディングの台詞となって感動と涙を誘う。

この公演では、1 幕は平和なアフガニスタンの少年時代、2 幕はほぼ、タリバン占領中のアフガニスタンが舞台である。また 2 幕でアミールと父が移住するフリーモントはアフガン移民が最も多い。そこでこの舞台の俳優は、アフガニスタン出身か、その近辺の関係者である。West End の公演では、映画やテレビの有名俳優なしに、これほど見事に演じられ、人気がある公演は驚きだ、と賞賛された。アフガニスタンを愛する故郷と伝える俳優達の感情のこもった演技が、観客を感動させたと言える。特に友情をつらぬく少年ハッサンとその息子ソーラブを一人二役で演じるコスティンが名演技であった。

ハッサンを悲劇に追い込み、死に至らせ、息子までも苦しめたアセフは、原作では少年時代にすでにヒットラーの遺り残したアウガニスタンの民族浄化をやると主張するナチ信奉者と語られる。舞台ではハッサンと会う度、モンゴル系黄色人種の平たい鼻と貶め、汚れたモンゴル系の少数民族ハザラ族を排除すべきなのだと、喧嘩する。ハザラ民族が祈りを忘れない敬虔なイスラム教シーア派であるので、ペルシャ系パシュトゥン人のスンニ派支配階級は弾圧してきた。武力支配を好む少年のアセフは、ソ連のアフガニスタンに対する軍事制圧を歓迎する。成人すると到来したタリバン軍（スンニ派）の将校となり、カブールを支配し破壊し、シーア派のハザラ人を殺戮する残虐なテロリストとなる。

『凧追い』にみられる人種差別・民族問題は、イスラム教徒の移民問題や難民拒絶を観客に思い起こさせる。この公演の前にチチェスターで『屋根の上のバイオリン弾き』を見た。その最終場面は、背景幕に現代の難民達の映像が映り、舞台上のロシアを追放されるユダヤ人達が難民なのだと意識させた。

イスラム教徒の移民・難民や、ロヒンギャ難民などの問題を、私たちは人種差別と偏見を捨てて、人種をこえた人類愛をもって解決することができないのだろうかと感じさせられた。だが、戦禍の中で親友を失って初めて、自身の人種差別を認識し、20 年以上も経って、やっと贖いへの道に進んだアミールを考えると、つくづく理想は難しいと思う。それでもハッサンの純粋な愛とアミールの贖いに心打たれ涙する観客に囲まれ感動的な観劇だった。　（玉崎　記）

⑺ 『ビリー・エリオット *Billy Elliot*』（9 月例会　8.）

ミュージカル『ビリー・エリオット～リトル・ダンサー～』を 9 月 10 日㈯に赤坂 ACT シアターで観た。この日本公演を機に、映画とロンドン舞台、舞台 HD 録画映像、日本公演といった異なるメディアの「ビリー・エリオット」を、これまでの視聴・観劇経験を踏まえて検討してみたい。

まず、映画 Billy Elliot（邦題『リトル・ダンサー』）は、2000 年に公開されたイギリスのダンス・ドラマ・フィルムである。1984 年の炭鉱ストライキに揺れるイギリス北東部の炭鉱町に住む 11 歳の少年が、バレエに目覚め、家族の反対を押し切ってロイヤル・バレエ・スクールに入学するまでを描く。この作品は数々の映画賞を受賞したが、中でも監督スティーヴン・ダルドリ（Stephen Daldry）と脚本リー・ホール（Lee Hall）が常に評価され、作品自体の演劇的質の高さを明白にする。映画公開後、エルトン・ジョン（Elton John）が自身の音楽担当により新作ミュージカルにしようと提案し、演出と脚本、振付ピーター・ダーリング（Peter Darling）は映画スタッフのままで、他もイギリス演劇界の才能を集めてイギリス製ミュージカル舞台が誕生した。ステーィヴン・ダルドリ（1960 生）はシェフィールド大学（英文学専攻）卒業後、北部の劇場で演出の経歴を経てロンドンに出た。1992-98 年 ロイヤル・コート・シアター芸術監督となり、ロイヤル・ナショナル・シアターでも優れた舞台を作った。以来ロンドンの一流演出家として名を馳せている。ナショナル・シアター・ライブで日本上映された『オーディエンス』（The Audience, 2013 年 Gieguld Theatre）と『スカイライト』（Skylight, 2014 年 Wyndam's Theatre）は、全くタイプの違うドラマだが、どちらも見ごたえ充分な舞台だった。

脚本のリー・ホールは『ビリー・エリオット』の舞台に近い北部出身でこの脚本に子供時代の思い出を反映している。舞台と映画両方の脚本を書いており、映画を翻案した舞台 Shakespeare in Love（2014）は、好評であった。最新作は、Edinburgh Festival Fringe（2015）での公演から国内巡業を経てロンドンに来た Our Ladies of Perpetual Succour（National Theatre, 2016; Duke of York's, 2017. 8/26）である。5 人の若い女優が、Scotland のカトリック女子高生になり、芝居、楽器演奏、歌、ダンスをこなし、さらに 5 人以外の役柄を演じた一幕は見どころ満載だった。

振付ピーター・ダーリングも、常に高く評価される舞台を担当している。ロングランの『マチルダ』（Matilda, 2010）もオリヴィエ賞作品賞の『恋はデジャブ』（Groundhog Day, 2017）も、さらに『チャーリーとチョコレート・ファクトリ』（Charlie and the Chocolate Factory, 2013）も、それぞれイギリス人スタッフ制作のイギリス発新作ミュージカルだが Broadway に進出した。

こうした優秀なスタッフを結集して、2005 年に開幕するや、Billy Elliot: The Musical はこれまでで最高のイギリス・ミュージカルと批評家に大好評だった。

2006 年ローレンス・オリヴィエ賞 9 部門の候補にあがり、4 部門受賞し、2009 年トニー賞では 10 部門受賞した。他の様々な賞でも多数の賞を獲得し、とりわけ必ず優秀作品賞を受賞している。観客にも好評で、2013 年にはオリヴィエ賞観客賞を受賞し、ロンドンでは比較的大きなヴィクトリア・パレス劇場（1550 席）を 10 年間以上満員にして劇場改装のため 2016 年閉幕した（1200 万人動員）。

2013 年夏にヴィクトリア・パレス劇場で、主役少年以外は Musical Live の HD 録画映像とほぼ同

じキャストの公演を、1 階の 12-3 列で観たのだが、舞台から遠くても映画 DVD 視聴より格段に感動した。トニー賞授賞式の TV 放映で見た場面は圧巻だった。一旦バレエを諦めていたビリーが「白鳥の湖」の音楽に誘われ椅子を回して彼の得意なピルエットを踊らせた後、自ら踊りだすと、どこからともなく the older Billy が現れ、二人が一緒に踊るという幻想の場面が美しく演じられた（“ Swan Lake Pas de Deux ”）。ビリーのダンスは見事で、ワイヤに吊られ空で踊るのは、自由に飛びたいビリーの気持の比喩でもあった。空に浮かぶように踊り空を飛ぶのが、バレエの真髄とのこと、まさにその実現だった。だがそれ以上に、11 歳のビリーと一緒に同じ振付で踊る the older Billy が、プロのバレエはこんなに美しいのだと感銘させられた。映画では、クリスマスの日、ビリーが友人のマイケルにバレエを踊ってみせるのを、父が見て感動するという同じ場面がある。その場面と結末の大人になったビリーが踊る場面とを、舞台では同一場面に翻案している。映画は大人のビリーを有名なアダム・クーパーが演じ、バレエ公演で白鳥を踊る。空に一瞬飛び、舞う白鳥の美しさが印象的であった。この二つの場面を、舞台では巧みに幻想の「パ・ドゥ・ドゥ」に翻案している。

クリスマスの劇中劇は、映画と異なり演劇ならではの面白さがあった。映画ではビリーの家族で祝うクリスマスだが、舞台では炭鉱組合主催のショウとなった。ストライキ中の炭鉱夫たちがサンタクロースの扮装で司会し、皆が自作自演のショウで楽しむ。幕が開くと、クリスマスのパントマイムよろしく、人形が踊り、歌い、皆も一緒になってアップテンポなサッチャー首相風刺の歌（“ Merry Christmas, Maggie Thatcher ”）を歌う。人形が後ろ向きで始まり、前向くと皆お揃いの青色スーツのサッチャーである。仮面のサッチャー首相（多数）の他に巨大なサッチャーも笑わせる。ショウの最後はビリーの父の歌（“ Deep into the Ground ”）である。Sweet Charity の “ Big Spender ” を歌ってと言われるが、父は寂しい民謡を歌う。炭鉱夫のつらい生活と妻を亡くした寂しさを切々と伝える感傷的なバラッドを歌い、最後は涙で歌えないとビリーが助ける。無口でマッチョな炭鉱夫のお父さんの深い愛情を伝え、前述の白鳥の場面で踊るビリーを観て、ビリーのバレエ学校進学応援へと心を変える伏線になる。こういう心の動きがリアルに感じられる人物像により演劇として感動させられた。

アングリー・ダンス（“ Angry Dance ”）は映画から発展したものだが、壁が盾となるなど見事な振付で観がいがある。そしてバレエの少女達、炭鉱夫達と警官の争いの 3 つ巴のダンス（“ Solidarity ”）は、映画では 2 つの場面だったものを舞台ならではの一つの場面に振付けて、ダンスがミュージカルの物語を語る舞台として興味深い。さらにおばあちゃんとビリーの場面や友人マイケルとビリーの場面、そしておかあさんとビリーの場面など、映画ではドラマであったものをダンス・シーンにしたり、歌の場面に変えたりしていて映画には無かった音楽とドラマの融合がある。どの場面もダンスと歌とドラマの結びついた魅力に溢れている。それでいて、映画の場面よりずっと多く、台詞や会話、俳優のしぐさなどによるコメディで溢れ、楽しい演劇として成功している。

フレッド・アステアなどアメリカン・ミュージカルの言及はあっても、アメリカ的ではなく、だがロンドン発ミュージカル「オペラ座の怪人」とはまったく別種のミュージカルである（Time Out London）。イギリスの寄席や、酒場の歌やダンス、また民謡などに根ざしたいかにもイギリスらしい音

楽とダンスで語られる。ストの果て、炭鉱閉鎖の憂き目にあう炭鉱夫たちの悲劇的運命を背景にしていても、イギリス的ウィットにあふれたコミックな歌詞によって、多くの楽しい場面が作られ観客に愛される優れたドラマになっている。観客がビリーという少年の感情豊かな人物像に共感するのは演出の力である。

これほど楽しんだヴィクトリア・パレス劇場に又観に行こうと思っている間に、嬉しいことに2014年にHD録画された舞台映像が公開されることになった。ミュージカル・ライブ上映は、ナショナル・シアター・ライブと同じ系列映画館で、上映形式（1日一回上映で概して一週間の上映期間）も似ている。名古屋の上映館はTOHOシネマズ名古屋ベイシティで市中心から遠く、上映期間は3週間に延長されたものの、上映時間は日により異なり（観劇日は朝12：00開始)、不便である。録画映像内容は、ロンドン舞台と変わらない。しかし劇場の舞台に近い席から見るような大きい画面に魅せられ、良い席でも不可能なほどのクローズアップで見られ、どの人物も生き生きとしていて、主役ビリー役のエリオット・ハンナの無邪気な可愛いさとバレエに向かう純粋な心に感激した。

最後にロンドン版を踏襲した日本公演について。ロンドン公演の脚本・音楽・演出・振付・舞台装置などproduction全てをそのまま使い、国際スタッフ（international creative staff）が日本キャストを教え訓練してロンドン公演のとおり演じさせる。まず上演国へ国際スタッフが1年以上前に来日して、出演する子役を何回もオーディションしながら、訓練する。役が決まり、全員のリハーサルになると、ロンドン公演の演出・振付、音楽を再現するよう教える。ロンドン公演にcreditされたスタッフ（original staff）がこの1年以上の指導に来日するわけではなく、その代理に5人の国際スタッフが来日した。彼らはオリジナル・スタッフの演出・振付などを見ていて補助として、キャストに教えてもいた。演出、振付、舞台ステージング、フライイング、音楽監督などが国際スタッフで、日本人スタッフと協同で指導にあたる。これまでの日本人キャスト公演と異なり今回は様々なダンスを踊れる多くの子役を指導するために、1年半という準備期間を設け、常の海外から輸入の日本公演よりも練習期間が長く、ロンドンの舞台に劣らない水準の高さを求めた。しかし子役に差があり、私の観劇日は歌が得意な未来和樹がビリーで、今一つダンスにも歌にも輝きがなく、ロンドンの舞台に劣ると感じた。1ケ月後の梅田芸術劇場公演では降板したので、5人のビリー役中1番年長で背も一番高く、東京公演中に声変わりを迎えたと思われる。ダンスの上手い加藤航世の公演日では、感激したという感想を聞いた。

あとは九州に炭鉱があるからと決めた九州弁に不満が残った。

1年半の準備で東京と大阪で3ヶ月半の大盛況の公演を行った（17万人動員)。だが子役の訓練は公演中で終わったようである。ロンドンでは北部方言の喋れる子供でオーディションに受かった大勢の子を集め、10年間も続いた「ビリー・エリオット・スクール」を作り、毎日訓練をし、次々に声変わりした子供達を順に交代させて10年以上の公演を行った。そうした仕組みがないと子役が中心の公演は続かない。

最後にこの演目に関連し、ライブ・ビューイングに言及したい。以前からMETライブ・ビューイングでオペラを楽しんできたが、ナショナル・シアター・ライブのライブ・ビューイングはロンドン

舞台の客席での観劇に臨場感では劣るものの、舞台公演そのものが巧みに撮影され、演技、舞台装置などは充分に見ることができ、さらに有益なインタヴュー付きである。キャストのクローズアップ映像は、公演劇場での観劇を超えており、ライブ・ビューイングの価値は絶大である。こうした取り組みで、他にロンドンのロイヤル・オペラのライブもあり、地方に住む演劇愛好者にはありがたいシステムである。またロンドンのナショナル・シアターの評判作は、数多くの都市で国内巡業として公演される。2017 年公演の The Kite Runner は国内 20 以上の都市で公演される。日本公演のあった Top Hat, Singing in the Rain も国内巡業された演目であった。

そこで日本の国立劇場も、地方にできるだけ多く巡業してほしい。また巡業のできないような地方には映画館で録画映像を見せてほしい。国立劇場なのだから、そうした取り組みが必要だし、望ましいと思う。 (玉崎　記)

註

映画 Billy Elliot「リトル・ダンサー」(邦題) (2000 年公開 2001 年英語版 DVD 発売)

舞台ミュージカル Billy Elliot: The Musical (2005 年 3/31 preview ロンドン初演―2016 年 4/9 ロンドン閉幕 現在国内巡業中)

舞台中継録画の映画館上映 Billy Elliot: The Musical Live「ビリー・エリオット　ザ・ミュージカル　ライブ」(2014.9/28 録画。同年ロンドン上映開始、2014 年 12 月日本上映開始。2014 年 11/24 UK 版 DVD 発売。2015 年日本版 DVD 発売)

日本公演　ミュージカル「ビリー・エリオット～リトル・ダンサー～」(2017 年 7/19～10/1 東京 TBS 赤坂 ACT シアター開幕―大阪梅田芸術劇場 10/15～11/4 閉幕。ロンドン公演の制作をほぼ踏襲して、国際公演スタッフの指導の下、制作。日本人キャストによる日本語公演)

Ⅲ．2017 年夏　ロンドン（& ストラットフォード・アポン・エイボン）演劇事情

今年の夏は、それぞれ短期間であったが、6 月と 8 月にイギリスを訪れる機会があった。ロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンで Shakespeare を中心に次の 13 の公演を観ることができた。

① 6/3　Romeo and Juliet（Shakespeare's Globe Theatre）
② 6/5　Don Juan in Soho（Wyndham's Theatre）
③ 6/6　Love in Idleness（Apollo Theatre）
④ 6/9　Twelfth Night（ Shakespeare's Globe Theatre）
⑤ 6/10　Hamlet（Harold Pinter Theatre）
⑥ 6/12　Salome（National Theatre, Olivier）
⑦ 6/16　Antony and Cleopatra（Shakespeare Theatre, Stratford-upon-Avon）
⑧ 6/17　Julius Caesar（Shakespeare Theatre, Stratford-upon-Avon）
⑨ 8/8　As You Like It（Sam Wanamaker Playhouse）
⑩ 8/9　Queen Anne（Theatre Royal Haymarket）
⑪ 8/10　Tempest（Barbican）
⑫ 8/11　King Lear（Shakespeare's Globe Theatre）
⑬ 8/19　Much Ado about Nothing（Shakespeare's Globe Theatre）

本稿では、以上 13 の公演を 3 グループに分けて論じ、ロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンの演劇事情の一端を明らかにしたい。一つ目のグループは Shakespeare's Globe Theatre と Sam Wanamaker Playhouse での公演(①④⑨⑫⑬)、二つ目はロンドンのウエスト・エンドでの公演（②③⑤⑥)、そして三つ目はロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンでの Royal Shakespeare Company による公演（⑦⑧⑩⑪）である。

Shakespeare's Globe Theatre の芸術監督 Emma Rice は就任して今年で 2 シーズン目を迎えたが、その演出方針が劇場の運営委員会のメンバーから支持されず、来年の 4 月をもって辞任することとなった。運営委員会の彼女の演出に対する批判として、エレクトリック・ライトの多用、強烈な音響の利用などがあげられているが、彼女の就任以来、チケットの売り上げが落ちていたそうだ。前任者の Dominic Dromgoole の退任の後、公募で芸術監督に採用された Rice であったが、就任当初から、Shakespeare 劇演出の経験が足りないとして彼女の芸術監督就任を危惧する声が上がっていた。来年 4 月には Michell Terry が新芸術監督に就任する。彼女は女優としてこの劇場の舞台に立ったこともあるが、最近は主としてロンドンをはじめ各地の劇場で演出を手掛けている。来年からの観客動員数の回復が彼女の双肩にかかっている。Rice にとっての最後のシーズンとなったこの夏には、‘ Summer of Love ’ というテーマで、Romeo and Juliet, Twelfth Night, As You Like It, King

Lear, Much Ado about Nothing に加えて Tristan Bernays 作の Boudica が上演された。

Romeo and Juliet の演出は新たに English National Opera の総監督に就任した Daniel Kramer であった。ENO の総監督だからなのか、Kramer はこの演出でも全体的に音楽を多用していた。劇が始まると登場人物のほぼ全員が顔を白く塗り、黒い服を着て、舞台に登場し、舞台上に置かれた棺に座る。Lady Capulet と Lady Montague は玩具のような小さな棺を手に持って登場する。劇が始まるや、この劇が死に憑りつかれていることを暗示する。舞踏会の場面では、Capulet が怪獣のコスチュームを着て登場し、そのほかにも突飛な恰好をして登場する人物もいて、しかも全員で‘YMCA’をゼスチャーを交えて歌いながら踊る（もちろん観客もまきこんで)。何故怪獣のコスチュームなのか、何故‘YMCA’なのかが分からない。Mercutio は女優が演じていて、彼（彼女？）が殺害される場面では、Romeo に復讐の思いが燃え上がるようにはとても思えない。原作では男性なのに、何故女性でなければならないのか、演出の意図が分からない。バルコニーのシーンでは、実際舞台にあるバルコニーを使わず、わずか 30 センチほどの段差を設けた台で Juliet の部屋を暗示する。ほぼ同じ平面で二人が愛を交わす。何故そうしたのかが分からない。確かに、面白いと思った演出もあるにはあった。舞台中央にベッドが置かれ、左半分では Tybalt を殺害したために追放の身となった Romeo のことを Juliet が嘆き、右半分では、僧 Laurence を相手に Romeo が己の追放を嘆き悲しむ。空間的に別の場所でおきていることが、一つの場所で同時に演じられる。これまでにこのような演出は見たことがなかった。しかし、観客にシェイクスピア劇を楽しませることを狙って、音楽や豊かな色彩を多用したこの演出には違和感ばかりが感じられ、出来上がった舞台は star-crossed lover を描こうとしたシェイクスピア劇とは別物になっていた。

Twelfth Night の演出を手掛けたのは芸術監督の Emma Rice。今期で辞任することになった彼女にとってはこの劇場での最後の演出ということになる。辞任を迫られた理由もわかっているであろうに、最後の演出でも頑固に自分の流儀を変えず、音楽と照明とを多用した。音楽といっても、3 人の演奏者がバルコニーで演奏する激しいロックミュージックである。ロックミュージックでは、冒頭の“If music be the food of love, play on”という台詞のなかの music にはそぐわないように感じた。時代背景は 1970 年代のスコットランド。難破した船はこの年代に建造されたＳＳ Unity 号。Sir Toby はタータン模様のゴルフズボンを履いて登場する。Malvolio はいつも警笛を吹き鳴らしながらあれこれ指図する厳格な Scottish Presbyterian という設定で、スコットランド訛りの英語を話す。何故スコットランドなのかが分からず、しかももっと分からないのはこの Malvolio を女優に演じさせたことだ。女執事 Malvolio が女主人 Olivia に恋心を抱くことになる。もっとも、この 2 月に National Theatre で上演された Twelfth Night でも女優の Tamsin Greig が Malvolio を演じたし、さらに Feste も女優によって演じられた。実際に観ていないので何とも言えないが、National Theatre の公演には gender に関わる何らかの狙いがあったかもれない。少なくともこの公演ではそのような意図は感じられなかった。Feste は La Gateau Chocola という大男の役者に演じられていたが、派手な衣装を纏い、大げさに動き回るので Feste の持ち味がでていなかった。

Wanamaker Playhouse で As You Like It が 8 月 8 日から 12 日までの 5 日間 Oxford University

Dramatic Society によって上演された。The Globe Council の一員であり、初代 artistic advisory group の一員であったが、生前、この劇場で演出する機会がなかった蜷川幸雄に捧げられた公演であった。蜷川のような革新的な演出ではなかったが、この劇場の雰囲気にあったこじんまりとした公演であった。たまたま隣に座っていた女性と話をしたところ、Phoebe を演じていた Imogen Allen の母親であった。彼女によると、Imogen は英文学専攻の学生、演出の Christopher White は化学専攻の院生だそうだ。一週間の稽古で公演に臨んだという。

King Lear の舞台は、工事現場のような場所で、2 本の柱も奥舞台と前舞台の仕切りも白い幕で覆われている。そこへホームレスのような一団が登場し、工事現場を整頓し、覆いの白い幕をすべて引きはがして舞台が始まる。これから始まる劇の中で、Lear の虚飾をすべてはぎ取って、実相を示そうとしているかのようであった。Nancy Meckler の演出は、全体的には、芸術監督の Emma Rice の傾向とは異なった、非常に抑えた演出であった。Lear を演じた Kevin R McNally の演技にも説得力があった。ただ、Romeo and Juliet と Twelfth Night と同じように、狙いのわからない女優の起用があった。Kent と Fool に女優が起用されていたのだ。舞台の上で Kent は原作の Earl ではなく Countess と呼びかけられていたから、たまたま女優が男性の役柄を演じていたのではなく、女性としての Kent を演じていたわけだ。何故そのようにしたのか。Fool も女優に演じさせたのは何故なのか。King Lear を観るたびにいつも気にかけているのは、Fool をどのように舞台から去らせるかということと、劇の最後の台詞を誰が語るかということだ。数年前に観た National Theatre での Simon Russell Beale の Lear は狂気の中で Fool を撲殺してしまうことで、Fool を舞台から退場させた。この演出では、Lear が少しずつ狂気の様相を呈しながらも人間の実相を認識しかけると、Fool はもはや自分の使命は終わったというような顔つきをして、静かに退場し、それ以降観客の前に姿を見せることはない。最後の台詞は、テキストによって、Albany あるいは Edgar が語るが、この演出では Edgar に語らせていた。Lear 亡き後の国を支えていくのは Albany よりは、悲しみ、苦しみを乗り越えてきた Edgar こそが相応しい。

この夏、最後に観た Shakespeare's Globe Theatre での公演は Much Ado About Nothing であった。演出は Matthew Dunster。場所はメキシコに移され、時代は革命の起きた 1914 年に設定されていた。ラテンダンス、ラテン音楽をふんだんに取り入れ、照明もマイクロフォンも使用されて、スピーディーでエネルギッシュな舞台になっていた。役者たちの好演にもよるのだが、時代、場所を変えても、シェイクスピア劇はこれほどまでに楽しくなるのかと思わされた。同じように音楽を多用した Romeo and Juliet と Twelfth Night には違和感を感じたのに、何故 Much Ado About Nothing にはのめり込むほど面白く感じるのか。この問題については本稿の最後でもう一度取り上げてみたい。

友人のイギリス人劇作家からの情報によると、新しい芸術監督 Michell Terry は、来年からは、Shakespeare's Globe Theatre で上演する総ての劇で、男優と女優を 50%ずつ起用するという。50%ずつとなれば、女性登場人物の少ないシェイクスピア劇にあっては、女優が男性の役柄を演じる可能性は格段に高くなる。これまでにもこの劇場で、Mark Rylance が Cleopatra を演じ、Vanessa Redgrave が Prospero を演じたことがある。男優が女役を、逆に女優が男役を演じることには実は

何の問題もない。Romeo and Juliet と Twelfth Night での男女混交には何の意図もないのかもしれない。Shakespeare の時代には女優がおらず、総ての役柄を男性の役者が演じたわけだし、わが歌舞伎でもすべての役を男性の役者が演じ、宝塚ではすべての役を女性の役者が演じている。男優・女優フィフティ・フィフティの採用という Terry の方針が実現すれば、現代における新しい演劇のあり方が Shakespeare's Globe Theatre から始まることになる。

ロンドンのウエスト・エンドでは 4 つの公演を観た。まずは Wyndham での Don Juan in Soho. 2006 年に Patrick Marber が、Moliere の Don Juan に基づいて、舞台をロンドンの歓楽街ソーホーに移して、書き上げた作品である。現代のソーホーに Don Juan が蘇るとどうなるかを描いた作品である。2006 年には Michael Grandage の演出で上演されたが、今回は Marber 自身による演出である。原作に手を加えてアメリカ大統領 Trump への皮肉に満ちた言及も行われている。Don Juan を David Tennant が演じるということで観客はほとんどが若者であった。Don Juan は仲間うちでは現代っぽく DJ と呼ばれる。 幕が上がると同時に聞こえてくるのは Mozart のオペラ Don Giovanni の序曲である。ここからは音楽はすべてロック。ダンスとセックスにあふれた舞台に観客席は多いに盛り上がっていた。Marber が目指したものは、Moliere と同じように、偽善に対する批判、享楽主義のわびしさだと思うが、派手な舞台はそれさえ忘れさせるほどであった。よくそこまでやるなと思ってしまう Tennant の性的な演技に驚愕しながらも、客席の歓声がむなしく響き、あまり楽しめなかった。Tennant への思い入れが大きすぎたのかもしれない。

Apollo Theatre では Terence Rattigan の Love in Idleness を観た。Rattigan は第 2 次大戦中に Less than Kind という作品を作り、それに手を加えて Love in Idleness として 1944 年に初演した。以後今日までロンドンで上演されたことはなかったが、今回 Trevor Nunn が両方の作品を合体して新版 Love in Idleness を作り、自ら演出した。‘ less than kind ’ は Hamlet、‘ love in idleness ’ は A Midsummer Night's Dream からの借用であり、作品中の台詞 ‘ too old to speak and too young to punch on the nose ’ は King Lear の Kent が語る ‘ Not so young to love a woman for singing, nor so old to dote on her for anything ’ を彷彿させ、この作品の背後にシェイクスピアの作品が感じられる。実は、この作品そのものが Hamlet を下敷きにしている。主要な登場人物は 3 人。夫が歯科医であった未亡人 Olivia Brown、その息子で、戦争が始まってカナダに疎開していたが、戦争が終結に向かうと帰国してきた 17 歳の Michael、国会議員であり、Churchill の重要閣僚の一人でもある Sir John Fletcher。Olivia は妻帯者 John と同棲中で、二人の仲は公然のものとなっている。帰国した Michael は母親が John と同棲していることを初めて知る。疎開中に社会主義に共鳴した Michael はことごとく John と対立し、母親に John と別れるよう説得する。Olivia も不承不承同意して、親子二人の貧しい生活に戻るが、世間を知るようになり、自分の恋愛の体験を積んだ Michael は、母親と John の関係を次第に認めるようになる。Hamlet と同じように、母親に対する息子の Oedipus Complex が描かれる。いかにも Rattigan 風の家庭劇であり、Nunn のかつての鋭利な演出は見られなかったが、じっくりと劇を楽しんだ。Olivia を演じた Eve West はこれまで何度か観たこ

とがあるが、今回も登場した役者の中では一番上手で、今やイギリスを代表する女優の一人となった。台詞からだけでは劇の時代背景が分かりにくいので、Nunn は当時のニュースの映像をスクリーンに映し出す工夫をしていた。

今夏ウエストエンドで観た劇のなかでとりわけ面白かったのは Harold Pinter Theatre での Hamlet であった。演出の Robert Icke は現在 Almeida Theatre の Associate Director を務め、2016 年に演出した Oresteia によって最年少で Olivier Award Best Director を受賞した、イギリス期待の演出家である。今年 2 月から 4 月にかけて Almeida Theatre で上演されたが、切符は完売。ウエスト・エンドに移って続演された。Hamlet を演じたのは Andrew Scott。彼は BBC のドラマ Sherlock で Benedict Cumberbatch 演じる Holmes の宿敵 Jim Moriati を演じて一躍有名になった。奇しくもドラマ Sherlock の宿敵同士が Hamlet を演じたことになった。Cumberbatch ほどの人気はなかったが、Scott の物憂げな演技は高く評価されてよいと思う。時代は現代に移されている。劇が始まるや、スクリーンに先王 Hamlet の葬儀が映し出される。エルシノア城は城というより現代の巨大ビルを思わせ、第 1 幕は何台もの CCTV が並んだ警備室から始まる。突然監視カメラの映像が乱れ、その一台に長い廊下を歩く先王 Hamlet の亡霊が映る。警備にあたっていた Bernard, Marcellus, Horatio はマイクロフォンを通して亡霊に話しかける。亡霊は背広姿なので、彼の生前の甲冑姿は言及されない。舞台左手には引き戸があり、その奥に内舞台がある。引き戸には薄いカーテンが引かれているので、引き戸が閉まっていても、内舞台が透けて見えるようになっている。実際に舞台裏で起きていることの一部が観客に見えるようになっている。たとえば、舞台上で Hamlet が父の死を嘆いているとき、内舞台では Claudius と Gertrude の結婚の宴が開かれている。この内舞台はいろいろ効果的な使い方をされている。たとえば、劇の最後で、内舞台にすでに亡くなっている 5 人の人物、先王、Ophelia, Polonius, Rosencrantz, Guildenstern が佇み、舞台上で Hamlet が倒れると、先王の亡霊が内舞台から出てきて、Hamlet を内舞台へと導き、Hamlet が死の世界に入っていくことを表す。そのほかにも優れた演出上の工夫がなされている。バックグラウンドミュージックが流されている。よく聞くと Bob Dylan の曲で、その物憂さは Hamlet の心情をよく表している。劇中劇の場面では、劇場の最前列の座席に座って Hamlet の作った劇を見ている国王 Claudius の表情をカメラマンが撮り、それを舞台上のスクリーンに映し出していた。危険を感じて Hamlet にイギリス行を命じる国王 Claudius に Hamlet は唾を吐きかける。「寝室の場面」で、母 Gertrude を Hamlet が責めると、父 Hamlet の亡霊が現れるが、Hamlet は亡霊の手を握り、抱擁するという今までに見たこともない演出が行われた。2 回の休憩をはさんだ 4 時間余りの長時間の上演であったが、時間が経つも忘れて劇に没頭した。Andrew Scott の Hamlet は、これまで観た最近の Hamlet の中でも、Mark Rylance, David Tenant, Benedict Cumberbatch と並ぶ、忘れがたい、優れた Hamlet であった。

National Theatre, Olivier では Salome を観た。今夏の観劇で強く印象に残った公演の一つである。Salome は、いま最も注目されて演出家の一人 Yael Farber が 2016 年に自ら書き下ろし、ワシントンの Shakespeare Theatre Company ために演出した作品である。この年の Helen Hayes Awards の最優秀演出家賞と最優秀作品賞を受賞した。今回はそのロンドン公演である。南アフリカ

生まれの Ferber は、2012 年の Mies Julie, 2014 年の Nirbhaya, 2015 年の The Crucible など、政治的、性的に抑圧された者の立場から作品全体をとらえ直してきた 。ここでもまた征服された民としての Salome を描いている。もともと『聖書』ではヨカナーンの首を欲しがった人物として‘ Salome ’という名前は出てこない。従来 Salome に与えられてきた「魔性の女」のイメージはヨーロッパの歴史の中で作り上げられたものであると考える Farber は Salome を男の歴史が生んだ被害者としてとらえ直し、まず、二人の‘ Salome ’を措定する。一人は Herod 王に肉体を奪われる被害者としての若い‘ Salome so called ’, もう一人はその‘ Salome so called ’ を見守り続ける‘ Nameless ’という名の老婆。彼女はいわば歴史からその物語を抹殺された全世界の女性を代表する。‘ Salome so called ’はローマ帝国から抑圧されたユダヤ人の一員としてヨカナーンの首を落とすことで反ローマへの革命に火をつけることのできる人物として描かれる。捕えられた‘ Salome so called ’の裸体の上に舞台の天井から滝のように砂が浴びせられる。Youtube で観ることができるが (http://ntlive.nationaltheatre.org.uk)、インタヴューの中で、Farber は Salome は大地のメタファーであり、植民地化された女性のメタファーであると語っている。その Salome と我々自身がどのように向き合うべきなのかというのが Farber のメッセージだと思う。シリアのソプラノ歌手とイスラエルのフォークシンガーが原語で歌う暗く陰鬱な曲が終始舞台に流れ、抑圧された者の悲しみ苦しみを表現しているようであった。ヨカナーンが英語ではなくアラビア語で語っていたために、十分に理解できない劇ではあったが、大変な緊張を強いられる濃密な 110 分の劇であった。

Royal Shakespeare Company による公演をストラットフォード・アポン・エイボンで 2 つ、ロンドンで 2 つ観た。

今年の夏シーズンのストラットフォード・アポン・エイボンは、“ Rome 2017 ” のタイトルを掲げ、Angus Jackson 総監督のもと、シェイクスピアの作品からは、Antony and Cleopatra, Julius Caesar, Titus Andronicus、Coriolanus が上演された。タイトル “ Rome 2017 ” からは、“ 2017 年においてローマ劇を上演する意義 ” といったニュアンスが感じ取れ、何らかのかたちで現代の世界状況を感じさせるようなローマ劇が展開されると予想して劇場に向かったが、その予想は裏切られた。Antony and Cleopatra の演出は Iqbal Khan。インドを舞台にインド人役者だけで演じられた 2012 年の Much Ado about Nothing と Iago に黒人を起用した 2015 年の Othello の演出家である。今回も何か刺激的な演出を見せてくれるものと期待していたが、「伝統的な」演出に終始し、何ら新しいものを感じなかった。かろうじて Josette Simon が魅力的な Cleopatra を演じてくれたのが救いだった。

Julius Caesar は “ Rome 2017 ” シリーズの総監督 Angus Jackson 自身の演出である。こちらも何ら新鮮味のない平板な舞台であった。1971 年に Trevor Nunn が芸術監督であった時、今回と同じ 4 作品を取り上げ、Coriolanus から始めて、Julius Caesar と Antony and Cleopatra を経て、Titus Andronicus に至るローマ帝国の勃興、絶頂、退廃を描いて見せた。2 作品を観ただけで判断してはいけないが、今年は Nunn のような一連の筋の通ったテーマを見て取ることはできなかった。役者

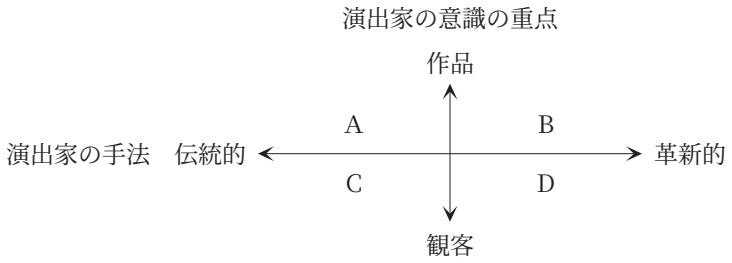
の演技の水準も決して高いとは言えなかった。

ロンドンの Theatre Royal Haymarket で Helen Edmundson 原作の Queen Anne を観た。2015/16 年の冬シーズンにストラットフォード・アポン・エイボンの Swan Theatre で初演され、今夏ロンドンへ移された。演出は Natalie Abrahami。Anne は父 James II 世の女官であった Sarah Jennings と幼いころからの親友である。姉の Mary II 世、ついで姉の夫 William III 世が崩御すると、Anne は跡を継いで女王となる。Sarah は Marlborough 伯 John Churchill と結婚し、宮廷に留まる。スペイン継承戦争とアメリカ大陸でのフランスとの戦争（アン女王戦争）を抱え、度重なる流産にも苦しむ Anne は Sarah を政策のアドヴァイザーとするが、宮廷では Daniel Defoe や Jonathan Swift に冷笑される。Sarah は夫が軍の Commander-in-Chief となり、戦争の継続を Anne に進言する。一方 Anne は次第に和平へと傾いていく。そのために、二人の親友の間に亀裂が生じるようになる。Anne の寵愛が Sarah から Abigail Hill に移り、二人の溝はますます深くなる。そのような折、Sarah の夫が軍資金横領疑惑で失脚する。Sarah は夫と共に宮廷から追放される。女性二人が政治にかかわる論争を繰り返すという点で、大変ユニークな作品であり、現代的ともいえる作品である。Emma Cunniffe が内気な女性から威厳ある女王へと変貌する Anne を熱演し、Romola Garai が“ I am so much more than her（＝Anne）”と思いを抱きながら、かつての親友から拒絶される Sarah を見事に演じていた。

もう 1 作、RSC がロンドンで上演したのは Barbican の Tempest である。Simon Russell Beale が 22 年ぶりに RSC に戻ってきて Prospero を演じた。22 年前にも同じ Tempest に出演し、Ariel を演じた。その時の Ariel は、劇の最後、Prospero が命じるすべての任務を終えて、解放されることになったとき、それまで自由を奪われていたことに対して怨念を込めるかのように、Prospero の顔に唾を吐きかけた。予想もしない演出に我々観客の中から驚きの声が上がったのを今でも覚えている。22 年経ってその Russell Beale が Prospero を演じているのだ。演出は RSC の芸術監督 Gregory Doran である。驚いた。Prospero の顔に唾を吐きかけた時の驚きとは比較にならないほどの驚きだ。これまでのシェイクスピア劇の枠組みを壊しかねない驚くべき企てを Doran はやってのけた。「劇制作の新しい領域を切り開く」ことを狙って、Doran はコンピューター会社の Intel と映画で使われている‘ cyber-thespianism ’の先駆会社 Imaginarium Studio と協力して、演劇の場にコンピューター映像を取り入れる実験をおこなった。Ariel が身につけた‘ live motion capture ’がコンピューターにつながれて Ariel の動きをコントロールする。婚礼の余興としてのマスク劇にもそれが使われて、これまで実現できなかったスペクタクルに満ちた舞台を作り出す。様々な色彩が用いられて非常に鮮やかな舞台が現出する。演劇のショー化という批判もあるだろうが、これからの演劇のあり方に一石を投じることになりそうだ。巨大な船舶の胴体内部が舞台になっていて、そこが様々な場面で効果的に使われる。Barbican では船舶の胴体内部を舞台として使えるが、ストラットフォードの劇場はいわゆるエプロンステージだから、そこに船舶の胴体内部を置くことはできないはずだ。どのようにしたのだろうか。いずれにせよ、今年の公演の中でも、Hamlet や Love in Idleness で舞台上のスクリーンに映像を映し出して、観客の演劇体験の幅を広げようとする動きはあったが、これからは、この

Tempest に倣うような演出が行われ、現代における新しい演劇が誕生してくるのかもしれない。

最後に、残した課題について触れておきたい。Shakespeare's Globe Theatre での、同じように音楽と色彩に溢れた Romeo and Juliet や Twelfth Night を面白いと思わないのに、Much Ado about Nothing は面白いと思うのは何故かという課題である。そういえば Barbican の Tempest も音楽と色彩に溢れていて、しかも面白かった。演出家で観客のことを意識しない人はいないと思うが、それでも、観客がどう思うかよりは、自分が演出する作品をどのようにとらえようかとの意識が強い場合があると思う。そこで縦軸に演出家の意識の中で重点が置かれる方向、上に作品、下に観客を措定しよう。演出の方法を考えるとき、作品が書かれた時代に即して伝統的な方法を採るか、時代を移してでも革新的な方法を採るかを考えるであろう。そこで横軸に演出家が用いる手法、右に革新的、左に伝統的を措定しよう。それを今チャートにしてみると、以下のようになる。



ここに出来上がった 4 つの領域は、

A：演出家の意識が作品に向かっていて、その手法は伝統的

B：演出家の意識が作品に向かっていて、その手法は革新的

C：演出家の意識が観客に向かっていて、その手法は伝統的

D：演出家の意識が観客に向かっていて、その手法は革新的

である。この 4 つの領域に今夏観た 13 の劇を、強引ではあるが、割り振ってみよう。

A：③ Love in Idleness　⑦ Antony and Cleopatra　⑧ Julius Caesar
　⑨ As You Like It　⑩ Queen Anne　⑫ King Lear

B：⑤ Hamlet　⑥ Salome　⑪ Tempest
　⑬ Much Ado about Nothing

C：

D　① Romeo and Juliet　② Don Juan in Soho　④ Twelfth Night

今年面白いと思った劇は B の領域、つまり、演出家の意識が作品に向かっていて、その手法は革新的である、と思った劇である。一方、面白くなかった劇は D の領域、つまり演出家の意識が観客に向かっていて、その手法は革新的である、と思った劇である。革新的な手法で作品そのものに迫ろうとしている演出家の公演は面白いが、いかに革新的であれ、観客を喜ばせようとしていると感じられ

る公演は面白いとは思わないのではないか。

今夏の観劇を通して、これからのロンドン、ストラットフォード・アポン・エイボンの演劇が大きく変わろうとしていることを実感した。

(酒井　記)